

392
53



始



392-53



禪畫洞池上文僊編重

どうして悟るの

大正
8. 11. 26
内交

黄璞宗管長 高津柏樹禪師筆

高
宗
管
長
高
津
柏
樹
禪
師
筆

以十二支柏樹
子



達摩大師對梁武帝圖 (舊作)

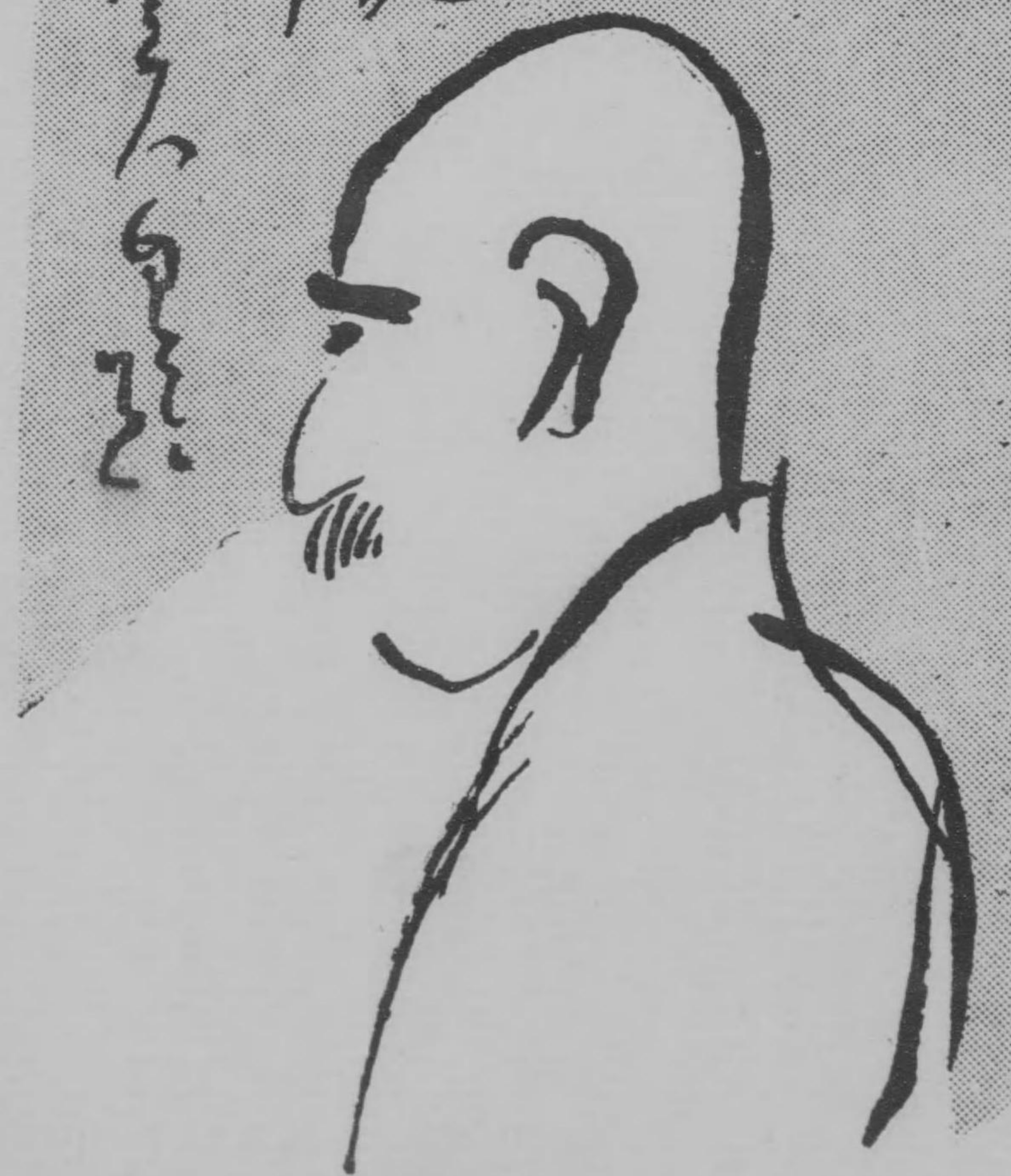


曹洞宗大本山總持寺所藏

卯
禪

畫
魔

福畫師之自題



禪書目次

一	鉢裏飯桶裏水	(五五頁参照)
二	中原の一資	(五八頁参照)
三	米を賣りに来る	(六二頁参照)
四	泣いたり笑つたり	(六七頁参照)
五	風動幡動	(七〇頁参照)
六	白紙三枚	(七七頁参照)
七	袋中の鴉	(八〇頁参照)
八	入門釋迦、出門彌勒	(八三頁参照)
九	溪深ければ杓柄長し	(九〇頁参照)
十	枯木寒巖に倚る	(九一頁参照)
十一	丹霞木佛を焼く	(九六頁参照)
十二	念佛鳥の聲	(九八頁参照)
十三	牡丹問答	(一〇二頁参照)
十四	一切聲是れ佛聲	(一〇六頁参照)
十五	南泉茅を刈る	(一一〇頁参照)



自在

自由

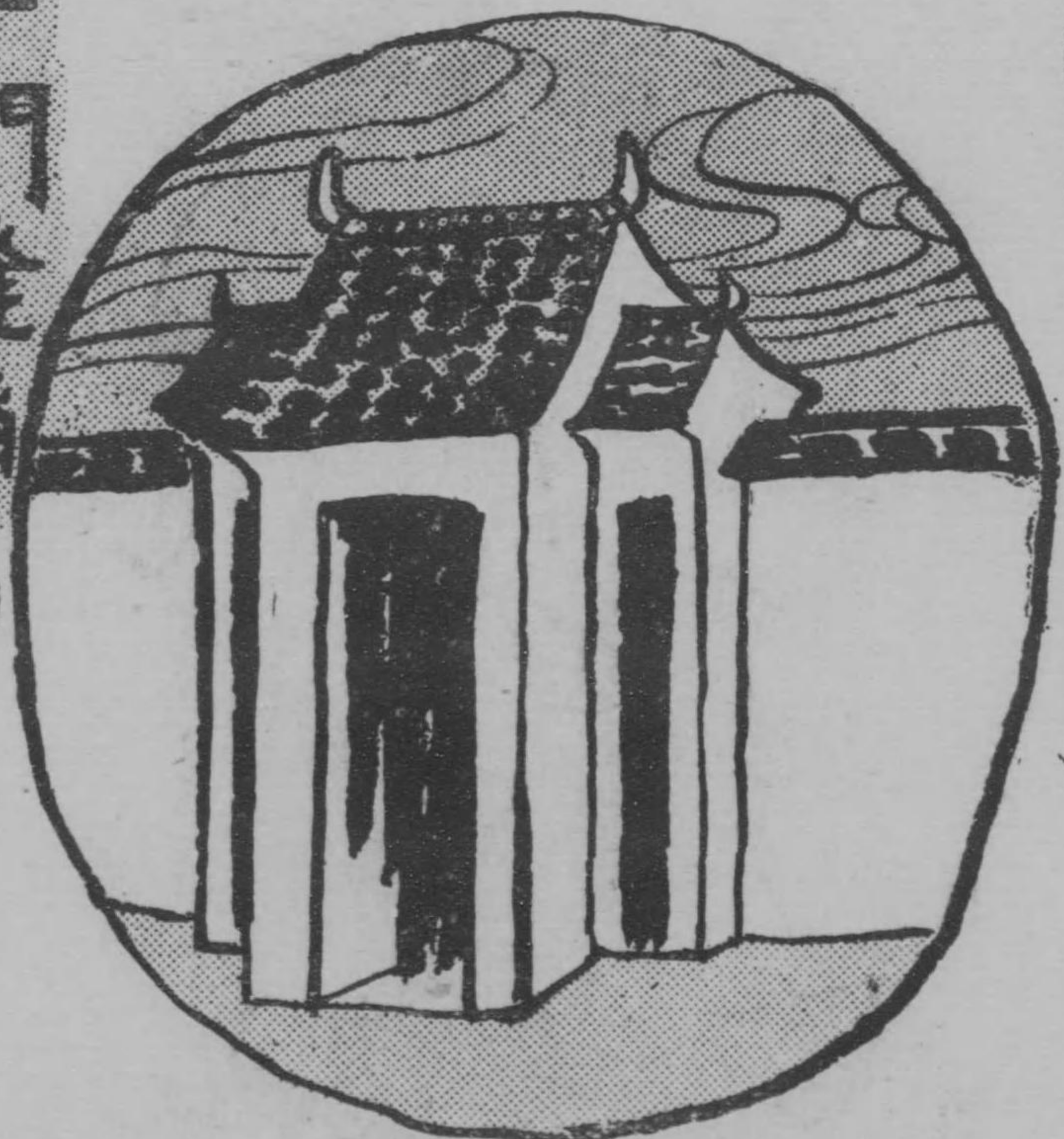


賣米來





出門逢彌勒



入門見釋迦



杖屨中一物



正 憑 時 如
當 麼 何



溪 深 物 長
水 柄



合點乎

佛燒霞丹





一切聲是佛聲



牡丹



目次

一、禪の意義……………一

誤れる観察……………一

禪の語義……………二

方便手段としての靜慮……………三

如來最上禪……………四

禪宗の名稱……………五

禪宗の起原……………六

拈華微笑……………七

所依の經典……………八

取捨自在應用無碍……………一〇

示月の指、敲門の瓦子……………一一

不立文字の宗旨……………一二

森羅萬象悉く經卷……………一四

禪は佛法の總府……………一五

禪の特色……………一六

二、禪的信仰……………一七

超人格的の佛陀……………一七

辯解は傾ち是れ廣長舌……………一九
 法性の妙用……………二〇
 整然たる秩序……………二二
 法性海中の安住……………二三
 人々具足箇々の圓成……………二四
 直指人心見性成佛……………二五
 自己内心の主人公……………二六
 自己は主観客観を超越す……………二八
 信仰の對象としての釋尊……………二九
三、禪と悟道……………三〇
 心猿飛移る五欲の枝……………三一
 迷ふが故に三界は城……………三三
 先づ大解脱を得べし……………三三
 信仰即悟道……………三四
 悟らぬ先と悟つてから……………三五
 毫釐も差あれば天地懸に隔る……………三六
 現象と本體……………三七
四、禪と實生活……………三九
 實生活と禪……………三九

世法と佛法……………四〇
 一定不變の大道……………四二
 道は遠きにあらす……………四三
五、禪の修養法……………四六
 坐禪の方法……………四六
 作佛を圖ること莫れ……………四七
 行も亦禪坐も亦……………四七
 修せずんば顯れず……………四八
 公案とは何んぞ……………四九
 一切世間の事悉く是れ公案……………五〇
六、悟道の實例……………五二
 一 雲門の活作略……………五三
 二 鉢裏飯桶裏水……………五三
 三 體露金風……………五三
 四 說法に續はない……………五三
 五 中原の一實……………五三
 六 夕涼み……………五三
 七 米を賣り來る……………五三
 八 淨庵和尚の劍法……………五三
 九 泣いたり笑つたり……………五三
 十 芭蕉庵の禪話……………五三
 十一 風動幡動……………五三
 十二 大覺世尊の兒孫……………五三
 十三 布袋和尚……………五三
 十四 南臺江の漁夫……………五三
 十五 白紙三枚……………五三
 十六 正受老人と狼……………五三

十七 袋中の鴉……………一六〇
 十八 入門釋迦出門彌勒……………一六三
 十九 都會の佛と山里の佛……………一六四
 二十 百丈に妻子眷屬ありや……………一六六
 二十一 古梁和尚と伊達侯……………一六八
 二十二 溪深ければ杓柄長し……………一七〇
 二十三 枯木寒巖に倚る……………一七二
 二十四 慧忠國師と丹霞和尚……………一七三
 二十五 丹霞木佛を焼く……………一七六
 二十六 念佛鳥の聲……………一七九
 二十七 陳尙書と行脚僧……………一八〇
 二十八 牡丹問答……………一八三
 二十九 雲居送袴の話……………一八四
 三十 一切聲是れ佛聲……………一八六
 三十一 梅子熟せり……………一八八
 三十二 南泉茅を刈る……………一九〇
 三十三 雪峰僧を踏倒す……………一九二
 三十四 趙州の石橋……………一九三
 三十五 世の爲には親疎はない……………一九四
 三十六 一休禪師の母……………一九六

三十七 一休禪師と蝸……………一九七
 三十八 繪に描いた虎……………一九九
 三十九 顔を焼いた了然尼……………二〇〇
 四十 芭蕉翁の辭世……………二〇三
 四十一 物外和尚と近藤勇……………二〇三
 四十二 雷の力も蚊帳の一重哉……………二〇六
 四十三 提唱に糝糠はない……………二〇三
 四十四 奕堂禪師の禿頭……………二〇八
 四十五 勝海舟の一喝……………二一〇
 四十六 橋本獨山と大黒……………二一三
 四十七 越溪和尚の説教……………二一三
 四十八 渡邊南隱和尚の金時計……………二一三
 四十九 死に心配はいらぬ……………二一四
 五十 自信と自惚……………二一五
 五十一 大晦日の稽古初め……………二一六
 五十二 劍客の念佛……………二一七
 五十三 澤庵禪師乗馬の秘訣……………二一八
 五十四 文晁と田崎草雲……………二一九
 五十五 西有嶽山禪師と日置歌仙師……………二二〇
 五十六 不具の子程可愛い……………二二二

五十七 本職が大切……………二二二
 五十八 坦山和尚の虫干……………二二四
 五十九 武士には武士の務がある……………二二五
 六十 一榮一落是春秋……………二二七
 六十一 北條時頼の治績……………二二八
 六十二 青砥藤綱と牛の尿……………二二九
 六十三 轉び寢の夢……………二三一
 六十四 中江藤樹と熊澤蕃山……………二五三
 六十五 俳味譚味……………二五五
 六十六 桃水和尚の生涯……………二五五
 六十七 畫僧月仙……………二五七
 六十八 阿部井盤根と梅の樹……………二五九
 六十九 五合庵の瓦寛和尚……………二六一
 七十 天下を掃除すべし……………二六一
 七十一 岸駒と頼山陽……………二六三
 七十二 伊藤東涯と三味線箱……………二六四
 七十三 小村侯と圓朝……………二六五
 七十四 乃木大将の寢具……………二六六
 七十五 加藤清正と千の利休……………二六六
 七十六 堀保己一の月見……………二六八

七十七 三人三色……………二七二
 七十八 作麼生か開き離き門……………二七三
 七十九 黄壁禪師と裴相國……………二七四
 八十 井の鹽を見るが如し……………二七七
 八十一 空劫已前の自己……………二七七
 八十二 洛浦山の圓頭……………二八一
 八十三 龍山の庵居……………二八三
 八十四 王道と佛道……………二八六
 八十五 惡辣無比の禪機……………二八八
 八十六 芥子に須彌を納る……………二八九
 八十七 中心の樹子……………二九二
 八十八 水牯牛の入浴……………二九二
 八十九 佛法僧に就て求めず……………二九四
 九十 誠拙和尚と五百兩……………二九六
 九十一 孫楚の禪機……………二九八
 九十二 趙州と保壽……………二九九
 九十三 一喝の重さ幾何……………三〇一
 九十四 心を制禦せよ……………三〇三
 九十五 雲居和尚の禪機……………三〇三
 九十六 陸且大夫の石……………三〇五

九十七 徳化の力……………三六
 九十八 宗祇の聲……………三六
 九十九 越溪和尚の顯拳……………三六
 百 須く劍を揮ふべし……………三〇

目次

一 禪の意義

誤れる観察

禪僧といへば滑稽洒脱なもの、禪學といへば難しいものと世間では相場が定つて居る、可笑しいことには禪に對する見方が斯様に矛盾して居ること、この矛盾した所が世間の禪に對する見解を誤つて居ることを證據立てる、滑稽な行をすることを禪僧の本面目である様に考へるのが偏頗な見方であると共に、玄々微妙、到底俗人には解らぬのが禪學だと思ふのも誤つた考である、盲が大勢集まつて象を撫で、象の足を撫でたものは象は九柱の様なものであるといひ、象の腹を撫でたものは象は大きな太鼓の様なものであるといふたと寓話があるが、禪に關する世間一般の觀察は多くは此の類である。

併し乍ら九柱の様な足も象の一部分であると共に、太鼓の様な腹も象の一部分であるから、禪に關するこれ等の觀察が全々禪と無關係なものではない、只それ等は各一

面の觀察に過ぎぬから、之を以つて禪の眞面目を悉知し得たりと爲すのは、明に誤解であるといはねばならぬ。

禪の語義

然らば禪とは如何なるものであらうか、順序として先づ禪といふ語に就いて説明をしよう。

禪とは梵語で、詳には禪那、譯して靜慮といひ、又定ともいふ、禪定といふのは梵語と漢語を並べ挙げたので、所謂梵漢兼擧の語である。

うつりゆく初め終も白雲の

あやしきものは心なりけり

吾々の心は常に甲から乙、乙から丙へと慾望を起し、果しなく動搖するものである、水の面に波浪が起れば月影を圓に映することが出来ぬと同じく、動搖常なき吾々の心は事理を明に判斷することが出来ぬ、従つて邪なる貪慾を起し瞋恚を生じ、それが

行爲の上に唄はれて種々なる悪業となるのである。されば吾等は先づ心を安靜にして正しく事物の道理を思慮せねばならぬ、即ち禪とは心を安靜にして宇宙の眞理を思慮する修養法として行はれたものである。

方便手段としての靜慮

禪は印度の語であるけれども、靜慮といふことは世界いづれの處でも古來精神修養法として行はれた、神道でいふ處の靜心、禩等も一種の禪である、論語には三省を説き中庸には自謙といひ、孟子には其の放心を求むることを重んじ、程明道程伊川等は主一無適の工夫を説いて居る、其の他西洋に於いても西部の人々の間には靜慮に類することが行はれた、即ち靜慮といふことは凡ての精神修養に共通した實行方法といふことが出来る、併し乍らこれ等は精神を安靜にする爲め單なる手段であつて、今日謂ふ所の禪とは大に意味を異にして居る、儒教や神道でいふ處のものが其の意味の禪でないのみならず、禪の立場から見れば戒定慧の三學の中の戒、布施、持戒、忍辱、禪

4
定、智慧の六波羅密の中の禪定等も又これ眞の禪とは違つた、部分的の方便手段に過ぎない。

如來最上禪

今此に説かんとする禪、我が國に現に行はれつゝある禪宗に於いて主張する處の禪は、かゝる部分的な、方便的なものではない、圭峰宗密禪師は、禪を分類して外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、如來最上乘禪の五種とせられたが、禪は元來斯様に分類せらるべきものではないけれども、強ひて此の分類に當て箝めていへば、印度教の禪や神道儒道の靜慮を始め、三學六度等の禪は所謂外道禪乃至大乘禪の範圍のもので、眞實の禪は即ち如來最上禪である、而して此の如來最上禪は他の四種の禪を包擁し、且つそれ等の次第階級を超越したものである。

所謂如來最上乘の禪は單に靜坐によつて精神を統一するといふのみではなく、戒定慧の三學を兼ね、六波羅密を具し、智識的には宇宙の眞理を徹見し、實行的には一切の諸善行を盡く圓滿具足することである、曹洞宗の瑩山和尚も坐禪は戒定慧に干るにあらざるも而かも三學を兼ねといふて居る。

禪家の名稱

禪は三學を兼ね六度を含み、一切萬行を包括して天地宇宙の眞理を徹證し體得するものであるから、之を禪と呼び禪宗と稱するのは當らぬ、佛法といひ佛道といふも尙ほ適當な名稱ではない、されば曹洞宗祖道元禪師の「正法眼藏」にも

佛祖正傳の正法眼藏涅槃妙心、みだりに之を禪宗と稱す、(中略)、西天東地從古至今、いまだ禪宗の稱あらざるをみだりに自稱するは佛道をやぶる魔なり

と嚴しく誡めてある、名の名とすべきは實の名にあらずで、一切法を包括し一切萬有に行涉つた大法を禪とか佛とか名を付するのは廣大無邊なる法を狭く小さく限るものであつて眞相を標する語ではない、只便宜上假に禪と呼ぶまでである、今日では禪宗

が曹洞臨濟黃蘗の三派に分れて居るが、いづれも宗祖の家風に基いてそれを奉ずる團體を各自區別する爲に假に設けたもので、元來一味平等の法性界に、斯様な分派區劃があるべき筈はない。

禪宗の起原

坐禪によつて宇宙の眞理に徹證し、宇宙の法則を體得するのが禪宗であるが、抑も禪宗の起原は何處に求むべきかといふ説に就いては種々説があつて、釋尊が降誕して周行七歩し、天上天下唯我獨尊と唱へられた時にあるといひ、又菩提樹下に於いて一見明星せられた當處であるといひ、又靈山會上に於いて迦葉尊者に大法を付囑せられた時であるともいふ、釋尊が始めて眞如實相の道理を會得し、宇宙の大法を體現せられたのであるから、禪の起原の釋尊にあることは勿論であるが、禪の起原は見星悟道の時であつて、禪宗が宗派として師資相承した最初は靈山會上に於ける拈華微笑であるといふが最も至當な見方であらうと思ふ。

見星悟道とは釋尊が菩提樹下に於て六年間端坐して天地宇宙の道理を思惟工夫し、

十二月八日の曉、燦然たる明星の光を仰いで豁然として大悟し、

吾と大地有情と同時に成道す

と宣言せられた時をいふのである、釋尊はこれまでの打坐冥想によつて一切衆生悉く宇宙の眞理を會得し、山河大地一切萬有凡て天地の法則によつて活動して居ることを悟られたのである、されば釋尊の成道と共に大地有情は成道し、釋尊の悟道と共に一切萬有は大悟徹底したのである、而して所謂禪は始めて人類の中の最尊最勝の一人によつて現成せられたのである。

拈華微笑

禪宗相承の最初たる拈華微笑のことは禪門に於いて頗る重要なこととして傳へられて居る、釋尊は靈山會上に於いて或日例に依つて説法の坐に登られた、集つた大衆は今日も佛が微妙な音聲を以つて深遠な大法を説き示さるゝことと思つて耳を傾けて居

ると、釋尊は一莖の金波羅華をツーツと差し出して拈つたまゝ一言半句の説法もせられぬ、大衆は何のことかサツパリ意味が分らぬので茫然として聾の如く啞の如くであつた、其の時大衆の上席に居つた摩訶迦葉のみはそれを見て莞爾と微笑した、其の時釋尊は

我に正法眼藏涅槃妙心あり、爾摩訶迦葉に付囑す

と仰せられ、佛が自ら證得せられた大法は恰も一器の水を一器に移すが如く、毫末も増減なくして大迦葉に傳へられたのである、このことは史的事實としては疑問があつて、遽に信ずることが出来ぬが、言説教理以外に大法を傳へたといふことは、禪が以心傳心すべきもので、所謂不立文字教外別傳の法であるといふことを具體的に表はしたものと大に意義のある話である。

所依の經典

佛教諸宗はいづれも所依の經典がある、天台宗は法華經、華嚴宗は華嚴經、我國の

宗派といへば淨土宗や眞宗は三部經、日蓮宗は法華經といふやうに、それ／＼佛所説の經を依り所として、其の教祖の立場に従つて宗派を建て、各自佛の本意は此の經にありと主張して居るのである、然るに我禪門に於いてはかゝる所依の經典といふべきものはなく、華嚴經でも法華經でも、乃至三部經でも論部でも、苟も取つて以つて佛の眞意を窺ふに足るものは悉く所依とする、一切の經論に即せずして而かも又一切の經典に背するものでもなく一切經悉く所依であると共に又一として所依としたものはない、不立文字教外別傳といへば、如何にも文字以外に不可思議な法でも傳へて居るかの様に思はれるけれども、禪は決して佛經祖錄を以外に特別のものを傳へるのではない、大小二乗の經論悉く自家屋裏の調度として之を用ゐるのであつて、不立文字といふも文字を以つて悉く排斥し去るといふのではない、所謂「佛の一字も心田の汚に、經を離るれば魔説に同じ」といふ語は誠によく斯間の消息を道破したものであると思ふ。

取捨自在、應用無碍

要するに禪宗に於いては一切の經文に束縛せられずして而かもよく一切の經文を應用する、只其の應用は何の選擇もなく主義もなく、手當り次第にするのではなく、對機の上下に従つて或は高尚幽玄な大乘諸經を用ひ、或は卑近平易な小乘經を取る等、取捨自在である、されば禪宗祖師の書き遺されたもの、中には大藏經中の文字を巧に引用してあるのみならず一般に禪僧の用ふる引導法語、問答商量等はいづれも大小乘の經中の語を適宜に横拈倒用してある、石頭大師の參同契に

言を承けては、須く宗を會すべし

と誠めてあるが、吾等は如何なる卑近な比喩の中からでも其に含まれた深遠な哲理を發見することが出来、又高尚な教理も其の宗意を會する時は日常生活の上の教訓とすることを得るのである、此の點からいへば禪宗は不立文字の教にあらすして大いに文字を立するものであるといふべきである。

示月の指、敲門の瓦子

斯様に禪宗に於いては一切の經論を排斥せず、凡てを所依經として手に任せて自由に應用するのであるけれども、而かもそれ等の文字言句は皆月を示すの指、門を敲くの瓦として用ふるまでのことで、指其物瓦其ものには用事はない、目的とする處は月を見せしむるにある、門を開かしめるにある、禪宗に於いては經論祖録を透して廣大無邊なる真理の大經卷を讀破せんとするのであつて、經論の文字に拘泥するものは經師論師として之を卑める、藥山惟儼禪師が或日久し振で説法の座に墜つて一言半句の説法をもせずして下座した時、僧が其の理由を詰ると

經に經師あり論に論師あり、争か老僧を怪み得ん

と答へたといふことがある、これ藥山が文字言を離れた大説法をしたのであつて、前に述べた世尊の拈華と同巧異曲の作略である、中峰和尚の語に

禪は即ち離文字の教、教は即ち有文字の禪

とある、教とはそれ〴〵所依經を基として立つて居る禪宗以外の各宗派をいふのである、教宗に於いても其の文字經論に拘泥せずして其の宗旨を會得すればこれ有文字の禪といふべく、禪宗は文字に拘泥せずして而かも文字を用ふること自由無碍であるから離文字の教といふことが出来る。

不立文字の宗旨

禪者の看經誦經は斯の如く文字言句に依りつゝ而かも文字言句を離れて眞如の當體を讀破するのであるから、普通の看經誦經とは全く様子が異つて居る、支那天童山の如淨禪師は我が道元禪師に法を傳へた祖師であるが、曾て高麗國の施主が財を喜捨して看經を乞ふた時に、拂子を以つて一圓相を劃して

「天童今日汝か與に大藏經を看讀す」

といつて拂子を擲下して下座せられたといふ、禪師は此の劃一圓相の當處に於いて宇宙の大經卷を看經せられたのであつて、一語一句を讀まず、一丁一枚も翻へさずし

て大藏經全部の意を會したのである。

支那徳山の宣鑑禪師は姓を周といつて金剛經に通達して居つた處から周金剛と呼ばれた、南方に不立文字教外別傳の佛法が盛えて居ると聞いて元來金剛經を金科玉條の如く尊んで居つた禪師は大に怪しからぬことに思ひ、自ら之を論破するつもりで金剛經の疏を背負つて出掛けた、先づ龍澤の崇信禪師を訪ふて大に商量するつもりで其の近處まで来て只ある木陰に休んだ、其處に一人の餅賣の老婆が居合せたのを見て徳山は恰ど空腹を覺えたので餅を買はうといふと餅賣の老婆は餅を買つてどうするといふ、徳山は

「勿論點心するのである」

と答へた、僧侶は朝と午の二食で、其の外に物を食するのは空腹で放心するを防ぐ爲で、之を點心といふ、老婆は徳山が餅を買つて點心しやうといふと

「貴僧の持つて居らるゝ荷物は何でありますか」

と問ふ、徳山が「これは金剛經である」と答へると老婆は更に

「金剛經には過去心不可得現在心不可得未來心不可得とあるといふが、若し心が不可得なものならば貴僧は全體どの心を點せんとせらるゝのか」と詰問した、徳山は從來金剛經の文字言句に就いて其の經意を會得した處の所謂依文解義の徒であつたから、今此の間に遇つては何とも答へることが出来ぬ、老婆は龍潭に就いて不立文字の宗旨を會得したものであつたから流石の徳山も一言の下に説破せられて終つたのである、徳山は茲に於いて依文解義の到底本分の宗旨に契當する所以でないことを悟つて、始めて我見我執を捨て、龍潭に參じたといふ、教者はよく經を讀み文義に通ずるけれども、未だ經を透して佛法的々の意を會し、之を自己身心の上體得することが出来ぬ、徳山は從來其の教者の優を以つて得々たるのであつたのである。

森羅萬縁悉く經卷

禪門に於いては一切の經に即せずして一切の經に依憑することは上來述べた通りで

あるが、更に禪的立脚地より見れば、黄卷赤軸の經典のみならず、山川草木、走獸飛禽、宇宙間に森々羅列するもの、悉くこれ意義深長なる大經卷である、吾等は一莖の草に就いても宇宙の眞理を讀むことを得べく、一塊の土壤にも天地自然の妙用を會取することが出来る、道元禪師の山水經にも

而今の山水は古佛の道現成なり、ともに法位に住して究盡の功德を成せり

と示されてある通り、山水が古佛の道、佛祖嫡傳の法を現成して居る、松は松の法位に住して四時翠の色を變へず、竹は竹の法位に住して常に上下の節を具へて居る、これ所謂究盡の功德であつて、吾等は之に對する時、必ず古佛の道を心讀し嫡傳の法を證會するのである、要するに禪者の眼から見る時、天地間の一切萬有は悉く大經卷である、大説法である。

禪は佛法の總府

佛教では各宗各派各教相判釋といふことを立てる、即ち五時とか八教とかいふ階

級を定めて各宗を其に配當し、自己の宗旨は最も佛意に契つたもの、最も高尚深遠な教義であるとする、然るに禪宗に於いては一切の經を以つて悉く所依とするのであるから各宗の教義を悉く包括する、五時八教の上位に位するのではなくして五時八教を網羅する大法門である、禪は靈山會上に於いて世尊拈華迦葉微笑の當處に於いて始めて大法が相承せられて以來、一器の水を一器に移すが如く滴々相承し來つたものであるから、世尊所説の法は悉く之を傳へて剩す處はない、されば頓教といひ漸教といひ半教といひ滿教といふも畢竟佛法の一部、大象の耳目口鼻の一局部に過ぎぬけれども禪は佛法の全體、大象の全部を把握したものであるから、實にこれ佛法の總府といふべきである。

禪の特色

上來説く處によつて禪は精神修養の一方便、一段たる打座空想のみを主意とするものでなく、宇宙の眞理を徹見し、天地の大道を體得するものであつて、佛所説の一

經一論に基いて宗旨を立てたものでなく、所謂佛法の總府なる所以はほぼ明になつたと思ふ、禪はかく宇宙の眞理を徹見して安心立命を得、天地の大道を體得して日常生活を律するものであるから、徒らに人世を罪惡視し、厭世的人生觀を以つて人を信仰に導き入れる所の宗教ではない、冷靜に世相を觀じ明晰に事理を判斷して萬有の進展を信じ、希望を以つて各箇に向上發展すべき道を説く宗教である、而して其の根底には以下の諸項に説くが如き確固たる大信念を基礎とするのであるから、通常世間に行はるゝ倫理道德の教の如き淺薄なるものではない、又一經一論に執着し、教祖の遺訓の技業に拘泥して教權の窟窟に齷齪するものではなく、時代に應じ機根に従つて自由に取り捨選擇するのであるから、如何なる時代の變遷に遇つても常に其進連に順應して人生の一大光明となるものである。

二 禪と信仰

超人格的の佛陀

宗教には高尚深遠な教理を有するものがあり、迷信的分子を多く含んだものがあつて、教理の上からいへば種々の區別があるけれども、いづれの宗教にもそれぞれ信仰の對象がある、神道の神、基督教の神、佛教の佛はいづれも信仰の對象である、禪宗は素より宗教であるから信仰の對象を立つるは勿論のことであつて、多くの場合之を佛といふけれども、其の佛の意義は他の宗教、他の宗派とは大に趣を異にして居る。禪門にいふ所の佛は全宇宙に遍満した廣大無邊な大靈である、時間的にも空間的にも際限のない、而して物質と精神との両面を包括したものであるから、之を大靈といふも實は適當な名稱ではない、されば禪門に於いては或は大毘盧舍那法身といひ自性清淨身といひ、眞如といひ法性といひ、其他種々雑多な名稱を用ゐるけれどもいづれも其の一面を彰す所の假名に過ぎぬ、眞宗淨土宗に於いて阿彌陀如來といひ、眞言宗に於いて大日如來といひ、或は觀世音菩薩といひ薬師如來といふのはいづれも人格的の名稱であるけれども、禪門の信仰の對象は人格を超越した實在であつて、時には人格となつて顯現する場合もあるけれども之を人格的のものと限ることは出来ぬ、此の

超人格的超精神的超物質的實在たる佛は全宇宙に遍満して到らざる所はないのであるから、吾々の周圍に森々羅列する所の一切萬有は悉く佛の靈光の片々である、吾等は從晝至夜斷えず純淨無垢の佛身に接しつゝあるのである、或僧が大嶺禪師に「如何なるが是れ一切處清淨」と問ふと大嶺禪師は

「瓊枝を截れば寸々是れ寶、梅檀を折れば片々皆香し」と答へられた、實に手に任せ拈じ來るもの盡く佛の寸々、法性の片々である。

谿聲は便ち是れ廣長舌

蘇東坡は文人としても禪客としても有名な人であつた、東林常總禪師に參じて必要を得たが、或時無情說法有情聞くといふ公案を透過して

「溪聲は便ち是れ廣長舌、山色豈清淨身ならざらんや、夜來八萬四千の偈、他日如何が人に擧示せん」

といふ偈を以つて所悟を述べた、滔々たる溪聲は佛の廣長舌であつて、此の無情の
 說法を聞いて、具眼の有情は天地の玄々微妙なる法則を會得する、鬱蒼たる山色も禪
 的に之を見れば如來の清淨身である、夜來無情說法の話を通じてると共に八萬四千の
 法門を悟り得たことであるが、之を他日人の爲に縱横無碍に擧示することは、如何に
 痛快なことであらうといふ述懐である、東坡居士は實に無情說法の話によりて宇宙に
 遍滿せる法性の當體を徹見し、大毘盧舍那佛に相見したのである。

法性の妙用

禪門信仰の對象たる真如は、石頭大師が參同契の中に述べられた通り「細には無間に
 入り大には方所を絶す」るものであるから一莖草の末にも、一微塵の間にも行涉つ
 て居る。

一莖草を拈じて丈六の金身となし、一微塵裏に大法輪を轉す
 といふ語もある通り、丈六の金身とは釋尊の肉身であつて、道の邊に生ふる一莖の草

も大解脱の眼からは釋尊の金身と見え、一微塵を取つて宇宙の眞理を談ずることも出
 來るのである。

又此の法性の働、真如の妙用は實に靈妙不可思議なものであつて或時は大暴風を起
 して天地を晦暝ならしめ河川を汎濫せしめ、或時は駘蕩たる春風となつて百花の紅唇
 を綻ばしめる、洞山良价禪師百泰首座に果實を喫せしめた時の語に

一物あり、上天を柱へ、下地を柱ふ 黒きこと漆に似たり、常に動用中にあり
 動用中に收め得ず

とある、實に無限の空間に遍滿して青黃赤白の色相を絶し 常に活動して止むこと
 なきも而かも之を動用の中にもみ收むべきではなく、動中に靜あり、靜を離れざる動
 用である。

整然たる秩序

宇宙の本體、眞如實相の妙用は斯の如く廣大無邊にして自由自在 毫末も之を碍ゆ

るものはない 而かも其の活動は不規律無秩序なものではなく、整然とした秩序があつて永久不變である、日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む、春來れば百花爛漫として咲き競ひ、秋來れば千山紅葉の錦を織る、四時の運行は一枝亂れぬ、鶴の脚は長く鴨の脚は短い、鳥飛んで天に至り魚淵に躍る、一切萬物悉く其の本具の性徳を發揮して毫も味ます處はない

清法位に住して世間相常住

とは實に這般の消息を道破した語である。

斯の如く宇宙に一定不變の法則があつて、萬有が常に其の法則に遵つて存在し活動して居るのは、畢竟これ法性の靈的作用であり、佛の精神的妙用である、大毘盧舍那佛は斯の如き妙相と妙用とを具したものであつて、吾等はその妙相妙體の中に包括せられ、且つ其の妙用に支配せられて從晝至夜の活動をなして居るのである。

法性海中の安住

吾等の信仰の對象たる宇宙の本體は、斯の如き妙體妙相妙用を具して居るのであるが、吾等はどうして之を信仰の對象とすることが出来るであらうか、上に述べた處は眞如法性の體相用を説明したのみであつて何故に吾等は之を信仰の對象とするかといふことに就ては、未だ一言も費さなかつた、これ最も主要なことであつて之が説明を逸する時は上來の言句文字は何等の意義をなさぬことになるのであるが、而かも其は簡単な語を以つて盡すことが出来る、吾等は本體の一分身である、法性海中の一泡沫であつて本體の妙用は左右せられて生住異滅するものである、されば吾等が本體の一分身であるといふことを自覺し、自己を本體に歸入する時は一切世間の事に對して疑惑もなく危懼もなく、憂喜苦樂畢竟これ本體の妙用によるものと信じて、安じて生活することが出来る、併し乍ら法性海に投入して安心を得るといふことは、決して姑息な安逸を貪ることではなく、宇宙の法則、自然の運行に従つて、人間として盡すべきは盡し務むべきは務めて、人力の及ばざる處は之を天地の妙用に一任する、其處に始めて確固たる信念が得られるのである、要するに吾等は自己も本體の一分である、眞

如の中に包まれて居るものであるといふことを明に自覺する時に於いて、不動の信念が得られるのであつて、此の意味に於いて宇宙の本體、眞如實相は吾等が信仰の對象となるのである。

人々具足箇々圓成

宇宙、所謂眞如法性の顯現であつて、吾等は之を信仰の對象とするのであるが、我が禪門に於いては斯の如き客觀の世界のみを信仰の對象とするのではない、吾々自己の内にも信仰の對象を發見する、佛性は法界に遍滿するものであるから、法界の一部分たる吾等の上にも佛性は具つて居る筈である、されば釋尊も

一切衆生悉有佛性

と示されたのである、而して佛性は大小の分際を超越して居る、かくして全宇宙を包括する佛性と吾等の上に具はつて居る佛性との間には、全體と部分といふ様な關係もなく、従つて大小廣狹の差別もない、宇宙即自己、自己即宇宙である、佛性は遠い處で

あるのではなく、人々各自の上に具つて居るのであるから、大悟徹底といひ成佛得道といふも、畢竟自己本具の佛性を徹見することである、道元禪師は
佛道を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝといふは自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり、云々
と示されて居る、吾等は自己を習ひ自己を明めて始めて佛道を成就し安心立命を得ることが出来る。

直指人心見性成佛

直指人心見性成佛といふ語は禪宗の教義を簡單に標すものとして最も廣く知られて居る、直に人心を指して佛性を徹見し佛道を成ずる、これ禪宗の極意であり佛心宗の端的である、併し乍ら茲に人心といふのは所謂慮知念覺の心ではない、知覺作用を司る感覺、情的活動をなす處の感情をいふのではない、感覺や感情は吾等の迷妄

を憎長し悪業の原因となるものとして坐禪儀の中にも

心意識の運轉を停め念想觀の測量を止め云々

と誠めてある、茲にいふ所の人心はかゝる部分的のものでなく、身心一如の上の心である、感覺や感情以外のものではないけれども感覺や感情に囚はれぬ、物質と精神との一切を包括した所謂涅槃妙心である、佛心の心である、吾等は各自此の佛心を具有して居るのであるから、之を直指し、之を徹見して所謂見性成佛をするのである、馬祖道一禪師の語に

汝等諸人各々自心是佛なりと信せよ、此の心即ち是れ佛なり

とある、馬祖大師は即心即佛を主張した祖師として又門下に多くの龍象を出した師家として禪門に廣く知られて居る。

自己内心の主人公

佛道を習ふといふは自己を習ふのである、悟を開くといふのは自己本來具有の佛性を

を徹見することである、されば端嚴和尚といふは常に自ら

主人公、主人公

と呼び自ら

諾、諾

と應諾して修養せられたといふ、吾等の日常の行爲が動もすれば常規を逸し本分を失却することのあるのは自己内心の主人公を忘れて居るからである、曾參が日に三度我身を省たといひ、孟子に放心を求むることを説いてあるのは畢竟此の自己を徹證し、自己を忘れざらんが爲の修養を教へたのである、宇宙の眞理といひ、眞如法性といひ佛といひ佛性といふのも吾等本具のものであるから二六時中自己を離れず自己又佛性の中に坐作進退をして居るのである、傳大士の偈に

夜々抱佛眠 朝々還共起 起坐鎮相隨 語默同起止

とある。

自己は主観客観を超越す

自己の上に具つて居る佛性は、法界に遍滿せる佛性であつて、其の關係は合體と部分といふも當らず、彼、是を含むといふも適當ではない、即心即佛、宇宙即自己である。
生死は佛の御命なり

とあるのは這般の消息をいふたのであつて、生死流轉の人身が、其儘不生不滅の佛身である、されば佛性を信じ宇宙の本體を信じて之に歸投依入するのは、又自己本具の佛性にも歸依することが出来る筈である、自己に徹底するといふことは自己を信ずるといふことであつて、客觀的の宇宙を對象とするよりも、信仰を求め、安心を欣ぶのは先づ自己に向つて之を求むるが捷徑であり且つ順序である、自己は主観であるから之を信仰の對象とするといふことは出来ぬではないかといふ疑問が起るであらうけれども、自己は宇宙を離れたる存在ではないから主観にして且つ客観である、否主観客観を超越したものであつて、自己を悟り自己を信ずるといふことが、聽て宇宙の

本體を悟り法界に遍滿せる眞如を信することになるのである。

信仰の對象としての釋尊

佛といへば直ちに釋迦牟尼佛を連想する、釋迦牟尼佛を信仰の對象とするとか、本尊にするとかいふ議論が禪宗の一部で論じられて居る様であるけれども、それは左程喧しく議論するまでもないことである、釋迦牟尼佛は人類の中で最も早く宇宙の眞理を徹證せられた、佛法の開祖であり禪宗の第一祖である、釋尊が一見明星の當處に於いて開發悟道せられたのは即ち宇宙の眞理を徹見し、眞如法性に歸依せられたのであつて、それまでの修業は畢竟自己省察であつたのである、釋尊は自己本具の佛性を徹見すると同時に、天地宇宙に遍滿して本體に相見せられたのであつて、一面に於いて超人格的ではあるけれども、其の現身は明に人格者である、釋尊は人類中最勝最尊最大な人格者であるから、崇拜の對象として人格者を要する程度の信徒の爲には釋迦牟尼佛を本尊とするも可いが、必しもそれに限るを要せぬ、禪的立脚地よりいへば

宇宙間の森羅万象 悉く取つて以つて本尊とすることが出来る、所謂一莖草を拈して丈六の全身となすことが出来るのである。

基督教に於いては基督を神と人類との間の仲介者としてある、人間は直接神に接することは出来ぬ、基督の仲介を俟たねば神の救済に與ることが出来ぬといふのが基督教に於ける神と人間との關係であるが、佛教に於ける、殊に禪門に於ける佛と人間との關係は上來述べ來つた通り、二にして不二であるから、釋尊は基督の如く人間と神との間に介在するものではない、人格的に見れば釋尊と雖も一の人格であつて吾々普通人と毫も異つたものではない、只悟れる釋尊は不生不滅の佛境界に安住し、迷へる吾等は生死の巷に流轉して居るのである、釋尊は「我は是れ已成の佛性はこれ當成の佛」と仰せられた、此の場合に於いて釋尊は自ら信仰の對象を以つて任せられたのである。

三 禪と悟道

心猿飛び移る五慾の枝

禪門では直指人心見性成佛とか、一見明星開發悟道とかいふ語の示す通り、見性悟道、即ち悟を開くことが最も重要とせられて居る、悟を開くとは宇宙の眞理を徹證することである、吾等は本來佛性を具して居ることは前に述べた通りであるから宇宙の眞理も已に悟つて居るのであるけれども、人間は貪瞋痴の三毒を始め種々雑多の煩惱妄想の爲に靈々照々たる心性の鏡を曇らされるが故に、明に天地の大道を徹證することが出来ぬのである。

衆生心水清ければ菩提の影中に現す

で、吾々の心に一點煩惱妄想の曇なき時は菩提の影を明に見ることが出来るけれども兔角衆生の心水は曇り易い、吾々の有して居る眼耳鼻舌身意の六根は色聲香味觸法の六境に對して常に貪慾を起して居る、

心猿飛び移る五慾の枝、意馬馳走す六塵の境

で、貪慾の爲に東奔西走する有様は恰ど猿猴の枝から枝へ飛び移つて暫くも止む時なく、春駒の勇みに勇んで靜なることなきが如くである、斯様に動轉狂噪した心を以つて世に處するものは正しく事物の道理を辨別することは出来ぬ、茲に於いて精神の修養が必要となる、所謂坐禪辨道も必要となるのである。

迷ふが故に三界は城

悟を開くことを解脱ともいふ、吾等の身心は煩惱妄想の爲に束縛せられて居つて自由無碍の働が出来ぬ、此の束縛を解き煩惱の窟窟を脱するのが所謂解脱であつて、解脱を得た境界に於いては明に天地の法則を辨じ、正しく人倫の大道を實踐することが出来るのである、

迷ふが故に三界は城、悟るが故に十方は空なり、本來東西無し、何れの處にか南北あらん

迷信家が東西南北の方角に迷つて日々の職業も自由にすることが出来ぬのはこれ方

角に束縛せられて居るのである、一定の場所を中心とするから東といひ西といふけれども元來宇宙には東西南北の方角はない、ありもせぬ方角の爲に束縛せられ、若くは愛憎好悪といふ様な感情の爲に束縛せられて廣い世間を狭くし自由な世の中に不自由な思をして暮す、これ所謂三界を不自由なる城とするのである。

先づ大解脱を得べし

古書にほとけとは結ばれたるを解くの意である、凡夫の心は妄想の爲に結ばれて居る、それを解いたのが佛であると書いてあるが、佛の語源としては信するに足らぬ附會の説であるけれども一寸面白い解釋である。

佛とは誰か結びけん白糸の

しつの小田巻くりかへし見よ

くり返して佛祖の遺訓を學び、努めて打坐して實相を念すれば、大悟徹底すること難きにあらず、要するに吾々は安心立命を待たれぬのも畢竟煩惱の束縛あるが爲であ

るから、安心を得んと欲せば先づ參禪辨道して大解脱を得べきである。

信仰即悟道

信仰の對象は宇宙であり自己であるといふことは前に説いたが、禪門では悟道といふことを重んじて信仰に就いて餘り多く力を入れぬ様に一般には思はれて居る、これ禪の眞面目を知らぬから起る誤解であつて、禪門に於いては信仰即悟道である、煩惱妄想の束縛を解脱して大悟徹底した境界は即ち宇宙の眞理、本具の佛性に徹見した端のたゞであつて、自己これ佛陀であるといふことを諦得した當處に於いて安心立命が得られるのである、瑩山和尚の坐禪用心記に

坐禪は人をして心地を開發せしめ本分に安住せしむ

とあるのは即ち這般の道理を示したものである、本分に安住するといふことは、佛陀の靈光に包まれ、佛陀の慈手の中に安かに生活することである。

悟らぬ先と悟つてから

解脱を得れば妄念の爲に累はさるゝことなくして宇宙人生の實狀を正しく辨識することが出来る、併しながら迷つた時でも悟つた後でも、宇宙人生其物には變はない、悟らぬ先でも山は高く屹え水は低きに流れる、悟つてからでも柳は綠花は紅、萬象は依然として變ることはないのである、東坡居士の詩に

廬山烟雨浙江潮 未到千般恨不消
到得歸來無別事 廬山烟雨浙江潮

とある通り、廬山や浙江の景色は悟らぬ先でも悟つてからでも別段變りはないけれども未だ到ずんば千般の執着がある、景色には變りはなくとも見る目に執着があると無いとでは大なる懸隔がある、法眼宗の祖師法眼和尚に修山主が問ふたことがある、

「毫釐も差あれば天地懸に隔たる、汝會すや」
法眼は之に答へて曰く

「毫釐も差あれば天地懸に隔たる」

語は同じであるけれども會した上と會せざる時とでは其の語に籠つた力量に大なる相違がある、雪峰義存禪師の處へ或僧が尋ねて行つた時、雪峰は門を開いて放身して出で、曰く

「是れ甚麼ぞ」

すると僧も又

「是れ甚麼ぞ」

と應じた、これも語は同じであるけれども僧の「甚麼ぞ」は只物真似であつて力がない。

毫釐も差あれば天地懸に隔たる

世をすて、身はなきものと思へども

雪のふる日は寒くこそあれ

で、悟つた境界でも冬は寒く夏は暑い、迷つた境界でも春の花は美しく見え秋の月は

朗かである、只其處に一點の執着があると無いとによつて萬有は我を累はす種ともなれば我を樂ませる種ともなるのである、信心銘に

毫釐も差あれば天地懸に隔たる、違順僅かに起れば紛然として心を失す

とある、違順は憎愛の念である、境に對して少しでも憎愛の念を起せば種々の妄念紛然として競ひ起つて自己本具の靈性を曇らせられるのである、大解脱を得た人には違順憎愛の念は起らぬ、従つて明かに萬有實相を見ることが出来るのである、要するに對境に變化はないけれども、能對の我に迷があるとなつて宇宙が其の姿を變するのである。

現象と本體

煩惱の爲に心性を昧まされて居るものも、解脱することによつて萬有の眞相を諦觀することが出来ることは上來述べ來つた通りである、所謂萬有の眞相とは現象界の萬有と本體界の實在との關係である、吾々の周圍に森々羅列する山川草木鳥獸蟲魚等は

常に生住異滅して暫くも止む時はない、所謂無常なるものである、併し乍ら此の無常な現象も本體とは離れたものではなくして、一面に於て生滅變遷常なきものであるけれども、一面に於いては常住不變なるものである、之を譬ふれば水と波との如く、水は風波の縁によつて千波萬波を起すけれども水其の物は不増不減である、而して水と波とは一如となつて波を離れて水なく水を離れて波はない、見性を離れて本體なく本體を外にして見性はないのであるから變遷生滅するものに對しても哀樂憂喜の情を起し妄執の念を生ずべきではない、然るに迷執の爲に本來清淨なる心性の明鏡を曇らされて居るものには、此の現象即實在なる萬有の真相が分らず、單に生滅變遷に涉る現象世界の面を見て迷執を起し愛着の絆に束縛せられて居るのである、解脱は誤れる宇宙觀誤れる人生觀を捨て、正しき宇宙觀、正しき人生觀を採ることである、常住の半面は無常あり、無常の半面には常住がある、有といひ空といふも別々のものではなく、有にして空、空にして有なることを知つて、一切の境に對して執着せぬのが所謂大解脱底の人である、法藏論主の心經略疏に

色即是空と見れば大智を成じて生死に住せず空即是色と見れば大悲を成じて涅槃に住せず

とあるのは實によく這般の道理を説いたものである、色即是空なることを悟つたものは生死流轉の現世に執着せず、空即是色と觀するとの向上の涅槃に住せずして大悲心を起して所謂向下却來の活動をなすをいふのである。

四 禪と實生活

實生活と禪

以上述べた處によつて禪門の所謂信仰は如何なるものであるか、又禪門の所謂悟道は如何なるものであるかといふことに就いては大體明になつたと思ふが、抑も信仰といひ悟道といふも、畢竟現世に於ける實際生活の上生きて働くものでなければ何等の價値はない、安心立命といふも心地開明といふも實生活と何等關係のないものは畢竟空理空論に過ぎぬ、されば禪門に於いては、行解相應といふて、了解し、悟つ

た處と、實地の行とが相應することを以つて理想とする、實生活を世法とすれば信仰や悟道は佛法であつて、此の世法と佛法とは元來別物ではなく、世法即佛法佛法即世法であるけれども、一般に日々の職業、日々の生活と佛法とは何等の關係のないもの様に思はれて居るのは大なる誤である、文殊菩薩は

我れ今法の佛法にあらざるものあることを見ず

といふて居る、文殊菩薩の目から見れば一切世間の事相悉く佛法である、否文殊菩薩を俟たずとも、前にも説いた通り大解脱の境界より見れば全宇宙は畢竟大毘盧舍那佛の法身であり、全宇宙の出來事は悉く毘盧舍那佛の活動であるから、深遠な佛法の道理も決して遠い處の議論ではなく、日々の行持の上のことに就いての教訓であるといふことが出来る。

世法と佛法

道元禪師は正法眼藏の中に

いはんや世務は佛法をさゆと思へるはたゞ世中には佛法なしとのみ知りて佛中に世話なきことをいまだ知らざるなり

と示されてある、世務に携はつて居る間は佛法のこと等に關係は出來ない、寺參りは年取つてからの事、禪學は隱居仕事であると考へるのは世法即佛法佛法即世法なる道理を知らぬからである、昔京都にある篤信な居士があつた、或時懸念な寺の住職が訪れると恰ど居士は店先で大福帳を擴げて算盤を弾いて居つた、住職が「何をしてお出でなさると問ふと

「大般若を轉讀して居ります」

と答へたといふ、これ商賈が其の儘佛法である、大般若轉讀の功德と大福帳轉讀の功德と毫も異はないといふ意味である。

禪は實行を尙ぶ、古人も

一丈を説得せんよりは一尺を行取するに如かず、一尺を説得せんよりは一寸を行取するに如かず

といふて居る、信仰が日常生活の基礎となり、悟道が實行の規則になつて始めて佛法は有意義となるのである。

一定不變の大道

道徳とか人道とかいふことに就いては古來哲學者や倫理學者の間に種々の説があつて、所謂異説紛々趨歸する處を知らずといふ有様であるが、これ哲學者や倫理學者が未だ徹底して居ないからである、道は一定不變なる宇宙の大道の外にあるべきではない。

梁つたふ鼠の道も道なれど

誠の道そ人のゆく道

といふ歌があるが、人には人の行くべき誠の道がある、誠の道とは即ち宇宙の大道であつて、之には異説や異論があるべき筈はない、吾等が打坐工夫によつて悟る處のものも畢竟この人として實踐躬行すべき誠の道である、別に難しい高尚な道理ではない

或僧が趙州和尚に

如何なるか是れ道

と問ふと、趙州は

牆外底

それ其處に牆の外に道はあるではないかと答へられた、僧は「そんな道のことではありません、大道を問ふたのです」といふと趙州は

大道長安に通ず

大道か、大道ならば坦々として都會の長安に通じて居ると又空惚けた答をやられたこれ趙州は僧が大道とか道とかいふ高尚なものがあるかと思つて問ふたのに對して、道は手近にある、牆外にあるのもそれ、長安に通ずる大道もそれであることを示されたのである。

道は遠きにあらず

悟を開くといふことも佛を信するといふことも、畢竟此の手近にある大道を實踐することである。

佛法は障子の引手峰の松

火打袋に鶯のこゑ

といふ通り、佛法は日常茶飯の間に嚴然として存じて居るのである、されば坐禪といひ修行といふのも、人々各自の務むべき道を正しく忠實に務める事に外ならぬ、白隠禪師に就いて參禪した老婆に或人が禪學上の話を聞かうとすると、其の老婆は

白隠が隻手の聲を聞くよりも

兩手を打つて商をせよ

と答へたといふ、白樂天が曾て抗州の刺史となつて居つた時、其の地で有名な禪僧鳥窠和尚を訪れて佛法の大意を問ふと、和尚は

諸惡莫作 衆善奉行

悪いことをするな、善いことをせよと解り切つたことを答へたので、白樂天は更に

「三尺の童子も之を知る」

といふと、鳥窠和尚は之に對して

「八十の老翁も行ひ難し」

と答へられた、解することは三尺の童子にも出来るかも知れぬが行することは八十の老翁にも難しい、倫理といひ道徳といふも前に述べた通り別段高尚なものでも難しいものでもない、所謂諸惡莫作衆善奉行の三句に盡きる、諸惡莫作衆善奉行といふのは己の盡すべきを盡し己の務むべきを務めることである、商人ならば兩手を打つて商をする、農夫ならば鋤鋤を把つて耕作をする、其處に始めて佛道が現成せられるのである、道元禪師は

吾等が行持によりて諸佛の行持現成するなり、諸佛の大道通達するなり

と示された、吾等が正しく自己の本分を盡す時、其處に佛が現れるのである、大道が通達するのである、吾等の行持が佛道に契ひ、吾等の身が其の儘佛身を現成する時、吾等は心中毫も煩悶もなく、懊惱なく、極めて安樂無爲の境界に住することが出来る

此處が禪に於ける悟と信仰と行持との一致點で、所謂信解行證の端的である。

五 禪の修養法

坐禪の方法

禪門は坐禪を重んずることは今更いふまでもないことで、信仰も、悟道も、實踐も皆坐禪によりて到達し獲得することが出来るのである、坐禪即ち禪門の修養法である吾等が安心立命することを得ず、一切の事理に對して常に迷惑し、從つて日常の行爲を正しくすることの出来ぬのは畢竟心が動搖して居るからである、境に對し轉ずるからである、されば吾等は坐禪によつて此の動搖を静めねばならぬ「衆生心水淨ければ菩提の影中に現す」であるから心水を淨く澄ましめることが肝要である、而して身は心を容れる器であるから、心を静止せしめんとすれば先づ身を静坐することが第一である、茲に於いて静坐は精神修養の關門であつて、坐禪は大悟徹底の要路である。坐禪には一定の法則がある、道元禪師の坐禪儀に次の如く詳しく坐禪の法が説いて

ある。

尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用ふ、或は結跏趺坐或は半跏趺坐、謂く結跏趺坐は先づ右の足を以つて左の股の上に安じ左の足を右の股の上に安ず、半跏趺坐は但だ左の足を以つて右の股を壓すなり、寛く衣帶を繋けて整齊ならしむべし、次に右の手を左の足の上に安じ左の掌を右の掌の上に安ず、兩の大拇指向ひて相柱ふ、乃ち正身端坐して左に側ち右に傾き、前に躬まり後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し鼻と臍と對せしめんことを要す、舌は上の腮に掛けて唇齒相着け、目は須く常に開くべし、鼻息微かに通じ身相既に調へて欠氣一息し左右搖振して兀兀として坐定す云々

これが坐禪の身相である、此の身相によつて坐する時は身心共に平靜を得た、所謂菩提の影を現することが出来るのである。

作佛を圖ること莫れ

坐禪の目的は悟を開くことである、宇宙の眞理を徹見し、天地の大道を證得するに
 あるのであるから、正身端坐して所謂宇宙の眞理天地の大道を思量分別すべきである
 が、而し其の坐禪は目的の爲の手段であつてはならぬ、坐禪の目的が悟を開くにある
 ならば悟を開いて終へば最早坐禪の必要はない道理であるけれども、禪門に於いて修
 する所の坐禪は斯様な方便的なものではない、坐禪其のものが悟でなければならぬ、
 されば道元禪師は又坐禪の心相を述べて

諸縁を放捨し萬事を休息して善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉
 を停め念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ

と示された、悟を開かうとか佛に作らうとかいふのは所謂有所得心であつて、實は悟
 の妨となるものである、されば又道元禪師は前掲の如く坐相を述べてから

箇の不思議底を思量せよ不思議底如何が思量せん、非思量、これ即ち坐禪の要術
 なり

と示されてある、要するに坐禪は、悟を開かんが爲とか佛に作らんが爲とかいふ有所

得心からではなく、只管に坐禪の爲に坐禪をすることがある、坐禪は佛の坐相に則つ
 て坐して佛の心相に準じて思量して佛の身心を吾々の身心の上に現前せしめること
 あるから、無始無終であつて坐禪の外に目的を有すべきではない、されば古人も
 一寸坐れば一寸の佛

といふて、少しでも坐禪をすればそれ丈佛の身心を現することが出来るのであるから
 光陰を惜んで打坐すべきであると教へて居る。

行も亦禪坐も亦禪

坐禪は正身端坐が正道であるけれども、更に修行功勳を積んで

行も亦禪、坐も亦禪

といふ様にならなければならぬ、脚を結んで痛い思をして坐るばかりが坐禪ではない
 行住坐臥、一切時一切處が坐禪三昧とならねばならぬ。

もし人一時なりといふとも、三業に佛印を標し三昧に端坐するとき、遍法界み

な佛印となり、盡虚空ごとく悟となる

とある、三業に佛印を標すとは身口意の三業が佛の三業と一致することである、日常の身口意の働が悉く正しい道に契ひ、佛の三業と一致する處に到れば、それが所謂「行も亦禪坐も亦禪」の端的である、坐禪は静である、身口意の諸業は動である、動中に静あり静中に動のあるのが其の坐禪であつて、經の中にも

寂靜を超たずして諸の威儀を現す

とある、諸の威儀とは日常の坐作進退であつて、それが少しも坐禪を離れぬ所に到つて始めて眞の佛境界を現成したものと云ふべきである。

修せずんは顯はれず

初めにも述べた通り人々具足箇々圓成で、吾等は元來佛性を具へ大道を悟つて居るけれども玉磨かざれば光なしとある通り、修行せず居つては折角具有せる玉も光を發することが出来ぬ、道元禪師は又

人々分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには現れず、證せざるには、得ることなし

と示された、修するとか證するとかいふのは即ち坐禪辨道することである、支那の儒者も

誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり

といふて居る、誠は天然に備つて居るものであるけれども、之を人間の行の上に顯はし實行して誠とするのは人間の務である、誠とは宇宙の眞理である、眞理を人間の上で現成して人道となすのは吾々の義務である。

公案とは何ぞや

禪には公案といふことがある、公案とは公府の案牘といふて、役所から出た法則規律といふ程の意味である、坐禪工夫をして悟を開くには古聖先徳の貽された法則規律に循はねばならぬ、平たくいへば公案とは悟を開く型である、昔の禪僧や居士達が悟

を開いた機縁を型として、それを工夫し其に倣つて悟を開く資にするのである、世間には坐禪とは公案を考へることであるといふ様に思惟して居るものがあるが、これ實に甚しい誤解である、かゝる誤解を生じたのは俗受け専門の所謂師家と稱する輩が矢鱈に公案を授けてそれを透過するを以つて參禪の能事畢れるが如くに教へたが爲である、それが爲に參禪するものは互に公案透過の數を競ひ、多く公案を透過することを以つて誇として居る、而かも其の透過といふことが眞に古聖先徳が悟道の端的に證契することではなくて、一定の言句を鸚鵡的に並べて、巧に師家の型に嵌ることである斯様な形式には何の意義もなく、何の生命もない、之を以つて悟を開いたとか參禪をしたとかいふのは猿芝居を事實と認めさせんとする様なものである。

一切世間の事悉く是れ公案

併し乍ら古則公案といふものが全く無意義ではない、古聖先徳が問答商量して開發悟道した言語や機縁を參究して其の端的に證入するといふことは參禪辨道の上に大

いに資益する處がある、公案は恰も富士登山の道の様なもので、南口から登つても北口から登つても富士山上の景色を眺めるといふ目的を達することは同じであるけれども、東西南北いづれの道から登つたものにもそれ／＼獨特の經驗がある、よりよく富士山を知らんとするものはいづれの方面からの經驗をも持つて居ることが必要である古聖先徳達はそれ／＼異つた徑路によつて開發悟道して居る、それ等の經驗をより多く參究することによつて吾等よりは親しく大悟の境界を極めることが出来るのである而して此の意味に於いて公案は有意義なものである、公案は必しも禪僧の師質の間に問答商量せられたことばかりではない、古來の聖賢達が貽した語句の中にも又其の行動の中にも見出すことが出来る、眞理を道破した語句、大道に契合した行動は時の古今、處の東西を問はず、取つて以つて公案とすることが出来る、されば本書には興味あり有益であると認められたもの約百則を輯めて參禪辨道に志す人の爲に資することゝした、其の形式に囚はれずして公案の眞面目に契當することに努めたならば禪の如何なるものであるかを知る上に於いても、又根底ある實生活をなす上に於いても利す

る處があらうと思ふ。

六 悟道の實例

雲門の活作略

今の支那廣東省の北部一帯の地を韶州といふた、其處に雲門山といふがあつて、唐末五代の頃、雪峰義存禪師の弟子文偃禪師が光泰山光泰寺といふを創て、四方の雲兄水弟を養つて居つた、雲門は寒山寺で有名な姑蘇城の附近に生れた人で、始め空王寺の志澄律師といふに就いて律を學んだが、後に睦州道蹤禪師に參じて睦州の爲に脚を折られた時に豁然として悟り、更に雪峰義存禪師の會下に在つて其化導を補佐して居つて、遂に禪師の大法を嗣續した人である、禪門五家七宗の一派雲門宗は此の文偃禪師によつて起つたのであつて、發棘たる禪機、自由無碍の作略を以つて學人を接化したのが爲に、雲門和尚に關する古則公案の有名なるものが頗る多い、或時の示衆に「釋迦牟尼世尊は生れた時に天地を指さして周行七歩し、天上天下唯我獨尊と偉い權

幕で四方を睨み廻したといふことであるが、山僧が其の時居たならば一棒の下に叩き殺して狗兒に食はして終つたであらう、而すれば佛法だの禪道だのといふ様な七面倒なことも起らず、至極天下は太平であるに相違ない」といふた、萬事が此の調子であるから、其の人の爲にする處の手段は頗る脱俗的であつて、此の垂示の如き、一休和尚が

釋迦といふ大馬鹿ものが世に出で、
多くの人を迷はするかな

といつたのと同巧異曲である。

鉢裏飯桶裏水

或時雲門座下の僧が雲門に向つて

「華嚴には塵々三昧といふことがありますが全體何をいふたものでありませうか」と問ふた、塵々三昧とは華嚴の事々無碍法界のことである、ライブコッツであつたか

と思ふが萬有は如何なる小さい物でもそれごとく一箇の小宇宙であると主張して居る、事々無碍法界といふのも恰どそれで、一切萬物が互に他の一切を含有して居る様子は夫の帝釋の網羅堂に飾つてある無數の珠が、互に他の一切の珠を映して居る様なものである、僧は斯様な珍らしい説を學んだので、これで一番雲門和尚をやり込めやうと意氣込んで來たものらしい、然るに雲門和尚は

「それは鉢の裏には飯があり、桶の中には水がある様なものぢや。別段難しい理屈はない」

と、何の造作もなく僧の強襲を撃退せられた、「鉢裏飯桶裏水」此の一語實に何とも思量分別を挟んで見やうがない、所謂超宗越格、超佛越祖の談である。

體露金風

天高く馬肥ゆるといふ秋晴の一日、一僧が又雲門に對して

「木凋み葉落つる時如何」

と問ふた、前の僧は理の上から塵々三昧と問ふたが、此の僧は事に即して門端を提起した、即ち自然界の現象其の物を捉へて、其處に佛法的々の意所謂宇宙の眞理を徹見しやうとしたのである、雲門は即座に

「體露金風」

と答へられた、秋風のことを金風といふ、颯々たる金風其の儘が眞如の全體露現である、雲門和尚も又事の上から答話せられたのである、併し理だの事だのといふ語に執着して雲門の意旨を付度しやうとすれば忽ち對面ケ里である、雲門と鼻をつき合せて居つても、雲門の顔が分らぬ、木凋み葉落つる時如何、體露金風、只それ丈のことである、苟くも第二念に涉れば颯々たる金風裏に在つて三伏の炎熱に苦めしられるであらう。

説法に糟はない

雲潭和尚が嘗て尾州犬山城主に請せられて説法したことがある、城主は一段高い處

に座を構へ簾を隔て、聞かうとしたので和尚は奮然として

「おれの説法には糟はない、こして聞くとは何事ぢや」

と云つたので、城主大に恥ぢて早速簾を徹して自ら下座に直つて聴問したといふ。

中原の一寶

唐が滅びて五代が互に勢を争つた時代の支那は暗澹たる亂世であつた、後唐、後晋、後漢、後周、後梁等が大梁や洛陽に都を定めて、水に浮べる泡沫の現はれては消え消えては現はれる様な果無い興廢を繰り返した。

斯様な時代に於いても、否、斯様な時代に於いてこそ、人は安心立命の必要なることを切に感ずるものであつて、當代の武人、多くは禪門の宗師家に參じて必要を諮ねた、後唐の莊宗皇帝は其の年號を同光といふたので又同光帝ともいはれた人であるが深く興化存獎禪師の道力に傾倒して其の接化を受けられた、或時皇帝は存獎禪師に向つて

「寡人は此の度中原の寶を手に入れたが誰も價をつけてくれるものが無い、和尚何とか價をつけて見て下さらぬか」

といふた、諸葛亮出帥の表の註には中原は魏のことであるといひ、文選の詩の註には洛陽のことであるといふが、今は其の様なことに用事はない、有にも無にも、正にも偏にも、向上にも向下にも偏らぬ佛法的々の至寶である、其の至寶が本來我が身に具はつて居るといふことは知つたが、何人もその内容を明にしてくれるものが無いといふ意味である、冷暖は自知せねばならぬ、自己本具の物の價踏を他人にして貰はう等と考へる様では同光帝もまだまだ充分な境界に達した人とはいはれぬ、興化は

「然らば其の寶を一寸拜見致しませう」

といつて同光帝の眠のつけ所を點檢した、そこで帝は幞頭脚を兩手で引いた、幞頭は甲頭巾で一種の冠である、帝は冠を引き上げて龍顏を現はし

「サア、これが中原の一寶ぢや」

と所謂絶體に眞如の當相を示された、興化は帝が中原の寶といふ一物を珍重して悟臭

紛々たるものがあるのを氣の毒に思つて

「君王の寶は天下何人も價踏をするものはありませぬ、當今の諱を犯さずといふて、陛下の御名さへ避けるといふ程であるから、御所藏の寶を價踏すること等は以つての外であります」

と答へた、元來佛祖相傳の至寶は有とも無とも菩提とも涅槃とも形容することは出来ぬ、所謂言亡絶慮である、それを價踏をしる等といふのは未だ無價の珍寶の如何なるものであるか分つて居らぬ證據である。

夕涼み

涼しい夕風が高粱の葉をサラ／＼と鳴して吹いた、夕月の影はかすかに西の空にほのめいて村里はスツカリ夜の幕に包まれて終つた、何處からか啾曉たる笛の音が流れて来る、村の若者が一日の勞働を慰する爲の手すさびであらう。

芋畑の間を、ソロリ、ソロリと西瓜畑の方へ歩いて行く白い物を身に纏ふた男があ

つた、芋畑を出外れんとした刹那、物蔭から突然躍り出た男は

「コラッ、西瓜泥棒!!」

と怒鳴つて白衣の男をねぢ伏せ

「おのれ太い奴だ、西瓜を盗まうと爲やがつて」

といひ様件の男を荒々しく蹴つた、

「痛い、痛い、何をするのぢや」

と老人らしい聲がした、

「オ、貴方は良寛様ではありませんか、どうも申譯がありません、私は又西瓜泥棒だとはかり思つて」

と打つた男は老人を抱き起して只管粗忽を詫びた。

「イヤ何、少し痛かつたが大事はない、斯ツと

うつ人も打たるゝ人も諸共に

如露亦如電應作如是觀

如露亦如電は金剛經の中の語ぢや、芋葉の上に置いた露からの思ひ付きぢや、涼しい風ぢやの、チト私の處でお茶でも飲んで行かつしやい」と少しも氣に止めぬ様子である、怨親平等、毫も心に滯滞がない、此の人こそ曹洞宗近世の清僧越後の良寛であつた、其の書は天下一品、其の歌は淡々たるが中に情趣掬すべきものがあると稱せられる、併し良寛は單なる書僧歌僧ではなく、確かに生死透脱の大人であつた。

米を賣り來る

臨濟義言禪師は黃壁斷際禪師の法を嗣いで今の臨濟宗の遠祖と稱せられる人である或時寺の事務を司る院主が前に居るのを見て

「尊公は何處へ行つて來られたか」

と問ふた、尋常の間でないことは明である、院主の出やうによつては忽ち雷の如き喝聲を浴せ掛けやうといふ様そぶりか見える、院主は

「飯米の残がありましたから近郷近在へ賣りに行つて來ました」

と答へた、正直な返答である、併しスツカリ賣り盡したなら可いが明き俵でも持つて歸りはせぬか、佛とか法とかいふ様なものが一粒でも残つて居れば今までの修業が全然只働きになるぞといふ意味で臨濟が

「黄米を賣り盡したか」

と問ふた、それに對して院主は「賣り盡して一粒も残つて居りませぬ」とキツバリ答へた、黄米は玄米のことである、そこで臨濟は持つて居た柱杖で空中に圓を描いて

「這箇を賣つたか」

と問ふた、這箇は本來の面目とか向上の事とかいふ賣買貸借に涉らざるものである、その物までも賣り拂つて終つて眞の無一物にならねばならぬ所謂放下底をも放下せねば眞の放下ではない、此の時院主は大聲に一喝した、臨濟に參じて居る丈に流儀は矢張大喝流である、拙僧は元來這箇等といふものは持つて居りませぬぞといふ態度である、臨濟は此の時可とも不可とも言はずにピシヤリと打つた。

次に食事のことを司る典座和尚が来たので院主と問答したことを談じた、典座はそれを聞いて

「院主和尚は貴僧の意旨が分つて居らぬと見える」

といふ、臨濟は

「それでは尊公は何せられるぞ」

と問ふた、典座は黙つて座具を展べて叮嚀に禮拜した、賣るべき一物もなければ何も大聲を擧げて怒鳴るにも及ばぬ、此の様な鹽梅に禮拜して退けば可いといふことを身振の上に表して答へた、臨濟はそれを見ると又ビシヤリと典座に一棒を付與せられた院主の喰つた棒の味と、典座の喰つた棒の味と同か將た別か、こゝは、實參實究でなくては分らぬ處であると、斯いふて終つては禪僧一流の馱法螺になつて終ふが、さればとて何とも説明の仕様はない、強いていへば院主の一喝も典座の禮拜も共にまだ其の解脱ではない、何物かに執はれて居るから一棒の下に打ち拂つてやらうといふ臨濟の慈悲の手段である。

澤庵和尚の劍法

澤庵和尚が柳生但馬守宗矩の邸へ行つた、家來のものは「薄穢い坊主だ大方乞食坊主であらう」位に思つて主人へ取り次がうともせぬのを強ひて取り次がせて宗矩に面會した、流石に宗矩丈は澤庵が當時將軍の歸依淺からぬ禪僧であるといふことを知つて居つたのである。

澤庵和尚は宗矩に向つて

「貴殿は將軍の指南役で劍道に於いては天下に並ない達人ぢやと聞いて居るが、若し戰場に於いて二二三の敵に會つた時は何となさる」

と尋ねた、宗矩は

「お尋ねまでもござらぬ敵なれば直ちに斬り伏せるまでのこと」

と答へた、

「然らば二百三百の敵に會はゞ」

「然る時は斬り抜ける分のことでござる」
澤庵和尚は宗矩の答を聞いて莞爾と笑ひ

「二人三人ならば斬り伏せるが二百三百の敵に會は、斬り抜けやうとは柳生氏にも似ぬ卑怯千萬な御覺悟、拙僧ならば何百何千の敵に會はうとも悉く之を斬り伏せるでござらう」

といふ、宗矩不審に思つて

「それは又如何なる手段を以つて」と問ふた、

「拙僧秘藏の趙州露刃劍を振へば幾千萬の敵と雖も毫も惧るゝには足らぬ」

「然らば其の趙州の露刃劍とやらは如何なるものでござる」

「それは以心傳心の寶劍、御眼に掛ける譯には參らぬが、斯いふ歌がござる、よく味つて見れば以心傳心の寶劍が何であるか相分るでござらう
心とは如何なるものをいふやらん

墨繪に書きし松風の音

これぢや、但しこれは謎ではござらぬぞ」

と呵々と笑つた、柳生宗矩は和尚の一言何とも知らず胸に應へて、それより和尚に參じて禪要を悟り、遂に劍法の上に於いても一段の進境を見たといふ。

泣いたり笑つたり

百丈 懷海禪師がまだ馬祖道一禪師の下にあつて修行して居つた時のことである、

或日山遊びに行つたが歸つて來てから潜々と泣いて居るので、同寮の雲水が

「懷海子、どうしたと言ふのだ、故郷の父母の事でも思ひ出したのか」

と問ふと百丈は

「いゝや、さうではない」

と答へて矢張泣いて居る、

「それでは誰かと喧嘩をして罵られたのだナ」

「いゝやさうでもない」

「そんなら泣くことはないではないか」

「泣く譯があるのだ、兎に角和尚の處へ行つて納の泣く譯を問ふて見給へ」

同寮の雲衲は無眼子のやくざ坊主であつたと見えて百丈の語路に轉却せられてノコ
馬祖山主の道一和尚の處へ行つて問ふた、すると和尚は

「俺にも解らぬ、懐海によく訊ねて御覽」

とこれも鼻であしらつて居る、雲水坊主恰で狐につまづれた様な心持で寮へ歸つて來ると百丈はカラ／＼と大笑をして居る。

「何だ、先刻は泣いて居たかと思へば今度は笑つて居る、尊公は譯の解らぬ男だナ」

と忌々しうに愚痴をこぼす

「ハ、今泣いただアレかネ、先刻は先刻今は今ぢやないか」

雲水には矢張何のことか解らなかつたといふことを物の本には「同事罔然たり」と書いてある、同事は同寮のものといふことである、「昨夜落花の雨、今朝流水香し」と

いふ句がある、昨日は雨が降つて今日は天氣が悪い、全體どういふ譯であらう等と、痛くなる程首をひねつて見ても其の理屈は解るものではない、禪語に曰く、「彼も一時此も一時」と。

芭蕉庵の禪話

今でこそ東京深川は煤烟と悪水に穢れた土地となつたが、芭蕉翁が小名木川の畔に庵を結んで居つた頃は、瀟洒な文人墨客の邸も其處此處に見え、優にやさしい三絃の音のもれる隠れ家も少くはなかつた、今は能登屋といふ薄穢い下宿屋になつて居る西元町の河岸にあつた芭蕉翁の庵へ、五月雨の晴間を見て、小名木川一つを距てた臨川寺から、佛頂和尚と六祖五兵衛とが打ちつれ立つて來た、六祖五兵衛と芭蕉翁とは日頃佛頂禪師に參じて共に佛向上の事を究辨した間柄であつた、五兵衛は坐に就くと禪宗坊主の問答する様な口調で

「如何なるか是れ閑庭草木裏の佛法」

と問ふた、閑かな芭蕉庵の庭には折柄雨を帯びた木々の葉末を揺がせて涼しい風が渡つた、翁は莞爾と笑つて

「葉々大底は大、小底は小」

と、これも問答口調で答へた、大きい芭蕉の葉にも小さい躑躅の葉にも、初夏の日光が眩しい様な光を放げ掛けて居つた。

風 動 幡 動

曹溪慧能禪師は支那禪宗の初祖達磨大師から六代目の祖師で、禪門中興の大宗師家である、黄梅山に於いて五祖弘忍禪師から衣鉢を授けられて南海の法性寺に印宗法師を訪ふた、日暮に境内を歩いて居ると二人の漢か刹幡の風に見て議論をして居る、刹幡は寺に説法のあることを一般に知らせる爲に建てる幡で、今でも益に寺の庭に幡を建てるのは其の遺風である、

「あれは風が動くのではない、幡が動くのぢや」

と二人の僧がいつた、

「イヤ幡が動くのではない、風が動くのぢや」

と他の一人が言ひ張つた、甲論乙駁、二人の争は何時果つべくも見えぬ、而して其の論する處が慧能和尙には淺薄極つたことばかりで如何にも聞くに堪えぬので、遂に

「それは風が動くのでも幡が動くのでもない、貴僧達の心が動くのぢや」

と嘴を容れた、與へていへば風も動き幡も動いて居る、けれども奪つていへば動いて居る儘で不動である、之を動くの動かぬのといふのは思ふものゝ心が動いて居るのである、流石に慧能は「菩提もと樹にあらず心は明鏡臺にあらず、本來無一物、何れ處にか塵埃を惹かん」と喝破して黄梅七百の大衆をして啞然としていふ處を知らざらしめた程の英靈の漢であるから、本來無一物の道理をかく實際の場合に當て、印宗門下の僧に自己の妄想妄見を悟らしめたのである。

大覺世尊の兒孫

京都東福寺の稚子に桃隠といふがあつた、叩き大工の倅であつたが才智の人並秀れたもので師匠からも深く愛せられ、當時東福寺に居た稚子はいづれも名門豪族の子弟ばかりで、桃隠が卑賤の出でありながら才智あるが爲に特に師匠の寵愛を受けるのを嫉んで、折もあらはウンと窘めてやらうと待ち構へて居つた。

或時庭掃除の済んだ後で一人の稚子が

「オイ、皆であの堀を飛び競しやうぢやないか」

といふと、いづれも

「面白い、行らう行らう」

と賛成した、すると今一人の稚子が、

「併したゞでは面白くない、堀を飛ぶ前に各自自分の先祖の家系を曰ふことにしやう」

といふと

「可からう」武士が一騎打をする時の様だネ」

でこれも異議なく可決、其の中には勿論桃隠も居る、實は桃隠の素性の卑しいことを知つて仕組んだ策略である。

扱、いづれも家系自慢の連中ばかりであるから

「われこそは某天皇幾世の未裔何の誰の何男」

「我こそは某大臣の子何某」

等と名乗つて堀を飛んだ、愈桃隠の番が来た、一同大いに嘲笑するつもりで片唾を呑んで居ると、桃隠は憶する色もなく、

「我こそは大覺世尊幾世の孫、姓は釋、諱は玄朔、桃隠と號す」

と聲高らかに名乗を揚げた、他の稚兒達は只啞然として顔を見合せるばかりであつた、これを悟の公案と見るは異なるものであるけれども桃隠は生れながらにして轉身の妙用を會して居つたといふことが出来る。

布袋和尚

布袋和尚は支那明州の人である、毎日大きな袋を擔いで町をのそくと歩いて居つた。

「お前さん全體そんな風をして歩いて何をするのだへ」と問ふものがある

「衲は人を待つてゐるんぢや」と相變らすのそと歩いて居る

「オイ、坊さん、向から人が來ましたよ」と冗談と、布袋は唯

「イ、ヤあれではない」

といふ丈だ、擔いで居る袋の中には日常生活の道具を始め何でも這入つて居る、七福神の一人に列せられたのはこれが爲であらう。

布袋は坊さんに遇ふと袋の中から果物を出して遣る様子をする、坊さんが浮かり手を出して受取らうとすると、布袋は果物を引込めて

「ハ、、、お前さんに上げるのではなかつた」

といふ、坊さんが怒つて立ち去らうとすると後から其の背を軽く打つて、

「衲にお錢を呉れないか」

といふ、どうかすると大道の真中や、木蔭等に袋に掛けてグウ／＼高いびきで寝込んで居ることがある、又小供を集めて袋の中から種々なものを出して遣りながら面白さうに戯れて居ることもある。

梁の貞明三年三月、明州嶽林等の廊下の外の岩の上で死んだ、其の遺偈に

「彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示ニ時人、時人自不レ知」

とあり、又一文錢を乞ふの偈といふがある、曰く

「一鉢千家飯、孤身萬里遊、青目觀レ人少、問レ路白雲頭」

と、いづれにしても不可解な坊さんである、「時々時人に示す、時人自ら知らず」は意味深長である。

南臺江の漁夫

玄沙師備和尚は支那福州閩縣の人で、幼少の頃から南臺江といふ處で父と釣をして居つたが、或夜父は過つて水に溺れた、玄沙は之を救はうとしたが最早父の體は急流におし流されて終つた、其處には木の間に洩れる物凄しい月の光が黒ずんだ水の上を照して居るのみであつた、玄沙は深い默想に沈んだ。

「一切諸法は水中の月の如しと古人がいふて居るが全くだ、今まで愉快さうに談をして居た父がもう永久に歸らぬ人となつて終つた、父の死は悲しいけれども考へて見ると我等親子は永い間殘忍な殺生の罪を爲續けて來た、父が生きて居れば尙ほ此の上どれ程の悪業を累ねたかも知れぬが、今晚の不慮の災難は父の爲に却つて幸福であつた、自分もこれを機縁として出家しやう、而して父の爲に菩提を吊らはう」

斯様に決心した玄沙は直ちに釣舟を捨て、參師問法の行脚の路に上つた、それは唐の咸通の初め、玄沙の年三十の時であつた、豫州開元寺の道玄律師の下で戒を授けられて其處で修行して居る間に、雪峰義存禪師が道玄律師と道友で親しく往來して居つたので、遂に雪峰に知られて其の爐竈に入ることとなつた、玄沙の發心の動機が根強い求道の念であつた丈に、其の修業の仕振も頗る熱心であつた、頭陀行といふ印度の古制に従つて嚴格に身を持ち、雪峰に就いて心性の徹見に全力を注ぐ有様は實に衆僧の驚異であつた、雪峰は備頭陀備頭陀と呼んで頗る之を重んじた。

白紙三枚

玄沙が住山してからのことである、或る座下の僧に手紙を持たして雪存の處へ遣つた、雪峰は玄沙が又何か修業上の感想でも書いて送つたものと思ふて大衆を法堂に集め、自分は説法の座に上つた、座下の者に法味を分たうといふ親切である。

雪峰和尚が玄沙の手紙の封を切ると、中からは三枚の白紙が出た、雪峰和尚は少し意外の感に打たれたが、稍暫くあつて會心の笑を浮べて白紙を一同に示し

「玄沙から来た手紙はこれぢや、サアいづれも讀めたかな、文意が解るかな」と見廻した、大衆は只茫然と臺上の雪峰を見つめて居るばかりで一言も發するものがない、雪峰は自分

「昔からいふではないか、千里同風と、玄沙の處の佛法も、我が雪峰山の佛法も、別段異つた處はない、異つた所がなければこそ白紙のまゝで玄沙の意旨は充分に山僧に通ずる」

といふ、使者の僧は玄沙に歸つて之を告げた、玄沙は笑つて

「雪峰和尚も大分老耄せられた、袷の意思をスツカリ見損つてござる」と云つた、之を祖録には

「沙曰く、小頭の老漢蹉過するもまた識らず」

とある、「蹉過するもまた識らず」が面白い、玄沙と雪峰とは所謂同道唱和底で、腹の底が互にスツカリ解つて居るので蹉過するといはうが識らずといはうが毫しも師弟の禮には背かぬ、玄沙の言葉には師に對する無限の親みが籠つて居る、同床に寐ずんば

被底の破れたるを知らずといふ語があるが、玄沙と雪峰とは實に同床に寐ぬる底の間柄である、南臺江に於ける發心は茲に立派に成就して居る。

正受老人と狼

信州飯山の正受老人は白隠禪師の正眼を諦開した有名な禪匠である、大勢參學のあつた中で、屈強な若者達が老人の度胸を試して見やうといふので深夜に戸外に隠れて居る老人が用便に出るのを待つた、老人それとは知らず戸外に出ると暗がりから躍り出た大男がイキナリ襟首を把つて

「これは何ぢや、佛か凡夫か」

と大喝した、老人は落着き拂つて

「袷も知らぬワイ」

といつたので、若者達も何とも二の句が繼げなかつた。

其の頃村の者で狼の兒を育て、居つたものがあつたが或夜犬の爲に噛み殺された、

それからといふものは毎晩澤山の狼が村におし寄せて来て人畜を害すること夥しい、正受老人は斯様な時こそ我か力を試すに可いといふので、毎晩戸外に出て坐禪をした老人は其の時の様子を人に語つて

「こちらの出やう一つで狼等も決して恐しいものではない、衲が坐つて居ると狼の連中が来て咽喉や顔のあたりを嗅ぐが此の間にも正念を持続し箇の事を工夫して居ると狼の群も何時の間にか静かに去つて終ふ」といふた、村人も觸らぬ神に崇なしといふ諺通り、暫らくは狼のするが儘に田畑を荒させて置く中に狼群は漸次村里へ出なくなつたといふ。

袋中の鴉

洞山門下の欽山文邃禪師が徳山門下の雪峰義存、岩頭全大歳の二禪士と共に行脚をして歩いて居た時、とある茶店に立寄つて休んだ、欽山は其の中では先輩ではあつたので、先づ二人に向つて

「身を轉じて迷路を出で、佛法の爲に大氣焔を吐き得るものでなければ茶を飲まぬことにしやうではないか」

といふと岩頭が

「それでは拙衲はお茶を飲むことが出来ぬ」

といふと、雪峰も同じ様に

「拙衲も轉身だの氣を吐く等といふことは出来ぬから其の資格はない」

といふ、兩人鋒尖を整へて欽の挑戦に應じたのである、欽山は

「二人共問答の仕様も知らぬヤクザ坊主である」

と口穢く罵つた、岩頭が

「それでは欽山和尚尊前の境界は如何でござる」

と更に一步進んで欽山の手許へ斬り込んだ、欽山はそれには答へず

「尊公達は袋の中の鴉の様なもので活すと雖も死するが如しぢや」

と岩頭の鋒頭を物ともせず、二人共一つ袋へ入れて終つた、岩頭は此處で轉身の作略

を示すつもりで二三歩退いて

「欽山和尚、御覽なさい、拙衲の眞面目が解りましたか」と得意の鼻をうごめかした、欽山は

「全體歳和尚はそれで可いとして義存和尚尊公の作略はどうぢや」と雪峰を顧た、雪峯は黙つて手で大きな圓を書いた、そこで欽山は

「成程これは面白い、岩頭和尚も一步を譲らなければならぬぞ」といふ、岩頭はカラ／＼と笑つて

「大違ひ大違ひ、雪峰和尚の境界はまだ／＼本分の田地とは遠うして遠しぢや」と兄弟喧嘩が始まりさうな様子である、

「口があつても茶を喫することの出来ぬ輩ばかりぢや實に情ないことである」と欽山和尚は嘆息した、岩頭が「見よ」といふたので雪峰が一圓相を書いたのは欽山の

目には禪語に所謂一等に泥團を弄するの漢と映じたのである、後には大宗師家となつて幾多の龍象を打出した兩人も此の時はまだ脚下未穩在な處があつたものと見える。

門を入れば釋迦、門を出れば彌勒

龍濟修山主の處へ翠巖和尚座下の僧が来た、修山主は羅漢柱瑋の門下の法嗣、翠巖は羅漢の師匠の雪峰の法嗣であるから、翠巖と龍濟とは法の叔甥の間柄である、龍濟和尚は僧に

「近頃翠巖和尚はどの様な説法をせられるか」

と問ふた、龍濟は翠巖の説法振等には用事はない、僧の脚下を探らうといふ野心あつての挨拶であるが、僧はそんなことゝは夢にも知らず眞正直に答へた、

「翠巖和尚は平生こんなことを申されます、門を出れば彌勒に逢ひ、門に入れば釋迦を見る」

龍濟は之を聞いて

「其の様なことをいふて居ては大法を相續する大器は何時になつても得られるものではない、門外にも門内にも佛は到る處現前して居る等といふのはあれは小兒

誑しの出鱈目サ

といつて僧が翠徹の説法を大事さうに珍重して居るのを容謝なく叩き落して終つた。
「それでは貴僧ならば何と申されまするか」

と僧が問ふた、果然此の僧他人の語脈裏に轉却せられて居る、龍濟答へて曰く、

「門を出て誰に會ひ、門に入つて何を見るのか、彌勒もなく釋迦もない、本來無一物といひ、説示一物即不中といふではないか」

「僧言下に省あり」

とある、此の僧既に充分機縁が熟して居つたと見えて龍濟の言を聞いて豁然として悟つた、悟つて見れば到る處に釋迦あり彌勒あり、所謂築着 磕着で、あちらへ行つても佛にぶつかり此方へ行つても菩薩にぶつかる、盡天盡地佛の光明三昧である。

都會の佛と山里の佛

中峰源禪師に或僧が問ふた、

「都會の佛様の様子は何でありますか」

源禪師曰く

「算盤を持つて物を賣つてござる」

僧曰く

「それでは田舎の佛様は」

源禪師

「鋤鋤を持つて働いてござる」

僧又問ふ

「山奥の佛様は」

源禪師曰く、

「獵をしたり柴を取つてござる」

佛様はこればかりではない、サアベル下げて馬に騎つた佛様もあり、印半纏を着て鋸を持つた佛様もあり、油だらけの着物を着て機械を運轉して居る佛様もある、馬

車の中や自動車の中にも佛様がないではないが、却つて少ないかも知れぬ。

百丈に妻子眷屬ありや

張秀才といふ居士が西堂智藏和尚に問ふた、

「山河大地は全體有としたものでありませうか無としたものでありませうか、又三世諸佛といふのは實際あるものか又は所謂方便に示された丈のものでありませうか」

智藏和尚は

「それは勿論、山河大地もあれば三世諸佛も歴然として出世せられたものぢや、虚や方便のものでは決して無い」といふを聞いて張秀才は笑つて、嘲る様に

「和尚さん間違つて居ますよ」

と嗤つたので智藏和尚は反問した、

「張さん、お前さんは誰かに聞いて来たネ」

「へい、實は百丈懷海和尚さんの處で少々聞いて来ました、百丈和尚は何を聞いても無を申しましたよ」

と張秀才は得意さうに鼻をうごめかした、百丈は西堂智藏の法允で、二人共馬祖道一の法を嗣いだ人である、智藏は話頭を轉じて

「時に張さんは家族があつたかネ」

と問ふた、張は

「愚妻と腕白小僧が二人あります」

と答へた、智藏和尚は更に問ふた、

「百丈和尚は家族がありませんか」

「冗談仰言つては不可ませぬ、百丈は古佛といはれる程の持戒堅固な人ではありませぬか、勿論妻子眷屬などはありません」

と張秀才が答へるのを聞いて、智藏和尚は語に力を籠めていつた。

「それでは張さん、お前さんが百丈和尚の様になつたならば祈も無と答へて上げやう、其の時こそ山河大地も三世諸佛も悉く無である」
 智藏は張秀才に離姻を勧めたのではない、又子供を捨てよといふたのではない、古佛となることを勧めたのである、妻があらうが兒があらうが、其の様なことに頓着はない、佛智見を開いて古佛と同生同死底の境界に至る時、山河大地も手裏に歸し、三世諸佛も我と同参である。

古梁和尚と伊達侯

岩峨古梁和尚は仙臺伊達侯の歸依厚い近世の禪匠であつた、幼少の時、伊達侯に茶を献せんとして過つて茶を侯の袴の上にごぼした、其の頃の大名等といふものは人間を蟲虻同様に思つて居たものであつたから堪らぬ、古梁自身は勿論近侍のものも只管詫びたが、どうしても免されぬので、古梁は幼少ながらも遂々覺悟を極めた、侯の前へ首を差し出して

「お許しかなければ止むを得ませぬ、サアお斬り下さい」

と端然として坐つて居る、伊達侯は之を見て始めて只者ならぬを知り深く之を愛した而して數十年の後には果して當時禪門屈指の宗師家となつた。

松島の瑞嚴寺に住してからのことである、豪族某の供養を受けて衆僧を率ゐて之に應じた、主は古梁の人物を試さうといふ腹で、御馳走は盡く魚肉づくめにして、様子如何と見て居ると、大勢の僧は皆茫然として爲す處を知らず、魚の御馳走を睨んだまゝ凝と坐り込んで居る、然るに古梁和尚は平氣でむしろ片ツ端から平げて居るので、傍の僧が見兼ねて

「老師、それは魚肉でございませぬ、出家が口にするのは慎まねばなりません」
 といふと、古梁はつくづく其の僧の顔を見て

「へー、此は魚肉かへ、尊公はよく知つて居るねー」

といふた、主も其の泰然として物に動せず、悪戯と知りつゝも供養を供養として受けて居る和尚の態度に感嘆して尊崇の念を深くしたといふ。

溪深ければ杓柄長し

義存禪師が雪峰山に在住の頃一人の奇僧があつて、常に山の麓に庵を建て、住んで居つた、多年剃頭せずとあるから千日かづらの様な蓬々と髪を延して居つたものと見える、柄の長い柄杓を持つて居て、それで谷川の水を酌んで飲んだ、雪峰山の往徠に僧が其の庵を訪れて

「祖師西來の意はどうであるか」

と問ふと、定つて柄の長い柄杓を差し上げて

「溪が深ければ従つて柄杓の柄も長くなければならぬ、これが達摩東土に來つた理由である」

と答へた、雪峯和尚此の奇僧の噂を聞いて、

「それは面白い男ぢや、袷が一つ其の境界を點検してやらう」

といふので、或日侍者をつれて剃刀を衣の袖に忍ばせて奇僧の庵を訪られた、和尚

は奇僧を見ると

「サア何とでも本分に契ふた、句を言ひ得れば可し、言ひ得なければ髪を剃り落して終ふぞ」

と激しい態度で剃刀を突き付けた、強く打つて其の響を聞かうとしたのである、定めて猛虎の怒れるが如き態度で抵抗して來るかと思ひきや、奇僧は溪川で頭を洗つて温しく雪峯和尚の前に跪いた、所謂剛に遇ふては柔といふ機用を現したのである、雪峯も又僧の作畧を肯定して其の長髪を剃り落してやつた。

果然奇僧は只者ではなかつたのである。

枯木寒巖に倚る

昔老婆があつて、厚く佛法に歸依し、常に一人の禪僧を供養して居つた、僧は庵を結んで獨り住んで居つたので、二八ばかりの美しい小娘に三度の食事を搬ばせたが、道徳堅固な僧は其の端麗にして且つ濃艶な姿も目に映せぬかの如く、日夜兀々として

坐定して居つた、老婆はそれでも尙ほ僧の境界に疑を抱いて居つたので、或日竊かに何をか娘に言ひ含めた。

例の通り夕飯を搬んで来た小娘が其の夜に限つて容易に歸る氣色もない、誘ふ水あらばといふ風情で、折々僧に媚のある眸を向けるけれども、何の反應もなく、僧は相變らず默然として打坐するのみである、姫御前の身のあられもないとは思つたであらうが、老婆の命令背き難く、娘は思ひ切つて僧の肩にすがつた、其の時娘は

「正當恁麼の時如何」

といふたと物の本には見えて居るが、果して其の様なキゴチない言葉を使つたかどうかは保證の限でない、顔に時ならぬ紅葉を散した位の處が事實らしい、僧は

「枯木寒巖に倚つて三冬暖氣なし」

といふた、水々とした妙麗の女を枯木に見たて、自分を寒巖に例へた等は今の言葉でいへば少々技巧を弄し過ぎた嫌がある、これでは照れ隠しと見られても止むを得ぬ。「此の年になつて色氣等は」

など、いふ爺さんに限つて油断のならぬものである、小娘は兎にも角にも其の場をつくろつて歸つたと見えて老婆に此の談をしたとある、二八ばかりの小娘としては頗る大膽である、此の様な役は今の世の不良少女でも一寸眞行が出来まい。

娘の報告を聞いた老婆は「果せる哉」と小膝を打つて

「自分は三十年來此の様な俗物を供養して居つた、實に馬鹿氣切つた事であつた」と口惜しがつて、直様自分で出掛けて行つて僧を放逐して終つた、百日の説法屁一つとは實に此の場合に於ける僧のことをいふたのでなあらう。

慧忠國師と丹霞和尚

南陽慧忠國師は六相慧能禪師の法嗣で、唐の肅宗代宗の歸依厚く、名實共に國師として一世の人心を指導した人であつた、初め白崖山の黨子谷に居つて四十年山を下らず、其の道譽徳風が都に聞えて勅によつて西院禪光宅寺等に歴住した、或時丹霞天然和尚が國師を訪問したが、時しも夏の真中であつたと見えて國師は晝寢をして居つた

の物を物の隙からチラと見たが素知らぬ顔をして玄關から訪れた、侍者耽源といふものが取次に出たので、丹霞は

「國師は御在山でござるか」

と問ふた。

「在山ではありますが、只今は一寸御來客と御面會致すことが出来ませぬ」

と、眞面目な様な不眞面目の様な答をした、慧忠國師は従本已來チャンと現前して居られるが凡夫二乗の輩には却々姿を見せられぬといふ意味もある、道がに南陽門下の侍者でも務めやうといふのであるから只者ではない。

「ホ、ツ、それは大層奥深い所にお住ひと見えませぬ」

と丹霞は揶揄した、侍者も却々敗けては居らぬ。

「どうして、貴僧方ばかりではない、三世諸佛の眼にも我が慧忠國師の御姿は見えませぬ、見んと凝すれば忽ち喪身失命でござるぞ」

と大いに向上の佛法を振り廻した、見んと要すれば白雲萬里、本來の面目は思量分別

の俗眼では窺ふことが出来ぬと威喝したのである、丹霞は侍者が今時の玄關番が主人の威光を笠に被て見すばらしい來客と見ると無暗に威張り散す様な態度をするのを小面憎く思つて

「流石に龍の子は龍、鳳凰の子は鳳凰ぢや、貴殿も却々偉い力働を具へてござるの」

と重ねて揶揄した。

國師が眼を醒したので侍者の耽源は丹霞の來た事を話した、而して手柄顔に自分の之に對する應對振を説明した、所が國師は賞讃すると思ひきや、侍者を引捕へて二三十打つ叩いて寺を趕ひ出して終つた、丹霞天然は之を聞いて

「それでこそ國師の稱號に恥ぢぬ、立派な腕前ぢや、袷が面會すれば痛捧は袷が喫したかも知れぬ、怖いこと怖いこと」

と南陽の大機大用を讚嘆した、國師が侍者を趕ひ出した意旨は謬つて南陽の佛法を安賣したからである、「居ることは居るが客には會はぬ」とか「佛眼にも見えず」とかい

ふて眞如を手品師の種か何ぞの様に取扱つたのは、佛法を認るものであつて南陽の擯斥を蒙むるは當然である、俱抵は小僧が指を豎てる眞似をしたのを見て其の指を斬つて終つたといふ、佛法商量は全く眞劍勝負の覺悟を要する。

丹霞木佛を焼く

丹霞天然は初め儒道の學を習んだ、然して進士の試験を受けて大いに官海に乗り出さうといふ勃々たる野心を抱いて都へ上る途中、一夜禪僧と相宿をして大いに議論を闘はしたが、遂に禪僧の爲に説破せられて志を轉じ、當時盛名噴々たりし會祖山の道一禪師に參して大いに箇の一大事を工夫した、其の後石頭希遷に相見して其の法を嗣ぎ、爾來諸方を行脚して自ら知見を鍊磨すると共に又機縁に應じて他を接化指導した。

成年の冬、洛陽の惠林寺に拜宿した時、寒威凜烈、殆ど堪え難い程であつたので、丹霞は佛殿から木像を露地へ持ち出して焚き、足や手を温めて好い心持になつて居つ

た、其處へ偶ま院主が來て其の様子を見た時の驚は一通りでない、後生大事と毎日恭しく奉仕して居る佛像を焼いて足や尻をあぶる等とは實に狂人の沙汰であるといふ程に正直な院主は思つたであらう。

「客僧、尊公は何をして居るのぢや、勿體ない、佛像を焼く等とは以ての外ぢや」と眞赤になつて怒鳴り立てた、丹霞は平然たるもので、杖で灰を掻き廻しながら

「行の正しい人間の體を焼くと舍利が出るといふから佛像にも舍利があるかと思つて試しに焼いて見たのサ」

といふ、院主は益憤々していつた。

「木佛に舍利等があるものか」

「ホウ、木佛は舍利が無いのかね、それぢやあ御脇立もついでに焚いてあたらうではないか、舍利もない様なものなら焼いた處で罰もあたるまい」

といふた、随分亂暴な挨拶である、其の様なことをしたから丹霞は目が潰れるか片輪にでもなるかと思つて居ると、却つて院主の眉毛が墮ちて終つた、餘り柁泥帶水して

卑近な説法をすると眉鬚脱落するといふが、院主は丹霞の活作略の意旨を會得することが出来ないで、其の行ばかりを見て勿體ないとか罰が當るとか世間並の妄想に捕はれて居つたので斯様な反對の結果を見たのである、丹霞は曾て修業中にも馬祖山で僧堂の聖僧の頸に騎つて一山の大衆を驚かしたことがあるが、凡て其の作略が人の意表に出でる、所謂常規を以つて律すべからざる處がある。

念佛鳥の聲

南泉山は支那地陽にあつて、馬祖の法嗣普願禪師が住したので有名である、其處に典座といふ職、即ち叢林の食事を司る役をして居つた僧が、或時自分の分と今一人分の特別の御馳走を拵へて庭園へ行つた、而して寺の山林庭園等の一切のことを司る園頭といふ役をして居る僧の處へ行つて二人で酒宴を始めた、いづれ春か秋の氣候の好い時節のことで、平生の爵を晴すべく豫め約束でもしてあつたことであらう。さて二人が鉢を展いて御馳走を始めやうとすると突然何處かの木の間に念佛鳥が鳴

いた、念佛鳥といふのは我が國でいふ佛法僧鳥のことであらう、園頭は之を聞くと傍にあつた枕をコツ／＼と叩いた、すると念佛鳥も又一聲鳴く、更にコツ／＼やると念佛鳥の鳴聲は止んで終つた、此の時園頭は典座に向つて

「どうだ典座和尚、合點が行つたかな」

と問ふた、鳥が啼いた、枕を叩いた、鳥の鳴聲が止んだ、只それ丈のことである、「合點が行つたかな」といはれて、はて何の事だらう等と慮知念覺に涉れば忽ち本分に蹉過して終ふ、典座は園頭より境界が一段劣つて居たと見えて、浮乎園頭の語尻にくつついて

「解らない、何のことだへ」

と反問した、園頭は何とも曰はずに只今一度

「コツ、コツ」

と枕を叩いた、此の音は從劫至劫天地のあらん限り十方に響き渡つて居る、今も尙吾等は之を聞くことが出来るけれども、第二念に涉れば園頭と同釜の飯を喫して居つて

も所詮聞き得るものではない、近世の禪匠狼玄樓和尚は此の一則を左の如く頌した。

昔日黃梁猶未熟
覺來了了悟浮生
胡爲典座深成夢
盡力枕頭敲不驚

陳尙書と行脚僧

陳操は斐休、李翺等と同時代の人で、嘗て睦州の刺史となつて居つた頃龍興寺の陳尊宿に參じて禪の妙諦を會得し、雲門や資福等とも道交があつた、後には尙書の官にまで昇つた。

或時、陳尙書が大勢の官吏と共に樓上に登つて居ると一群の僧が往來を通るのが見え、一人の役人がそれを見つけて

「あそこへ来るのは皆行脚僧でありますか」

と尙書に問ふた、尙書は

「いや、あれは行脚僧ではない」

と答へた、官吏は其の風態が確かに行脚僧であると思つて居たのに陳尙書がそうではないといふので不審に思つて

「それは又どういふ譯ですか」清淨な衣を着け行脚僧としての一通りの装をして居るのに行脚僧で無いとはどういふ解でありますか」

と訊ねた、陳尙書は

「今にあの坊主共が邸の前へ來たら検査して行脚僧でない譯を教へてやらう」

といつて暫く待つて居ると行脚僧の一團が官邸の前へ來た、陳尙書は此の時樓上から

「上座、上座」

と呼んだ、行脚僧の群は何か施物でも呉れるかと思つて上を向いた、尙書は屬官達を顧て云つた。

「どうです、拙者のいつた通り眞箇の行脚僧でないことがお解りになつたでござらう」

呼べば應ずる、別に不思議はないのに、尙書は何故それを行脚僧でない證據だと申

されたか、實は行脚僧に何も用事はない、始めから尙書は官吏達が行脚僧といふ語に執はれて居るのを見て、其の妄想を拂つてやらうといふ魂膽であつたのである、始めにそうではないといふた言下に於いて屬官達は尙書の意旨を會すべきであつたが、いづれも佛とも法とも知らぬ連中であつたか、或は近頃の官吏の様に一二度提唱でも聞いてスツカリ悟つた様な氣になつて居る自轉狂の連中であつたと見えて、尙書が幾度となく自分の姿を瞥見する機會を與へてもサツパリ合點が出来なかつた、上座と呼ばれて上を見るのは眞如實相の動である、行脚僧とか雲水僧とかいふ様な名を以つて限られたものではない、行脚僧といふ語に執着すれば既に眞實の行脚僧に相見することは出来ぬのである。

牡丹問答

地藏桂理和尚が曾て長慶慧稜、保福從展の二人と或る町へ行つた、地藏は長慶や保福の法眷に當る玄沙師備の弟子であるから、二人に取つては法の上の甥に當る譯であ

るけれども、境界の上からいふても年配の上からいふても寧ろ地藏の方が先輩であるらしい、扱三人が行つた町には有名な牡丹を書いた襖があつた、三人はそれを見るが目的でわざ／＼出掛けたのである、保福が先づ口を開いて

「成程見事な出来だ、實に立派な牡丹である」

と嘆賞措く能はずといふ様子を、然るに長慶は

「何だ、この様なものが何處が見事なのか、恰で成つて居ないではないか、見損つては不可ないよ」

と頭から貶し付けて終つた、地藏は二人の繪に對する評を聞いて、

「惜いものぢや、折角の花がスツカリ迷の因となつて終つた、一手は擡げ一手は捺ゆといふやうな譯ならば實に結構であるが、兩者共に牡丹花の眞の姿を見外して居る」

といつて長慶も保福も共に佛法の繪を鑑識する力がない所以を主張した、美術家にそれ／＼表現法の相違がある如く、宗師家にも作略の相違がある、地藏は必ずしも兩者

の表現を否定したのではない、地蔵は地蔵で自己獨特の表現をしたまでである。

雲居送袴の話

雲居道膺禪師は支那曹洞宗の祖洞山良价禪師の法を嗣いだ人である、雲居山は江西省南康府の西南山十里の處にあつて、山勢峻峻、頂上常に雲を以つて包まれて居つた處から此の名があるといふ、常に一千五百の學侶を聚めて洞山の宗風を擧揚したと稱せられる。

此の雲居和尚が、或時侍者に命じて袴を一着慥へさせ山内の一庵に住して居る道者に贈つた、こゝにいふ袴は今のツボンの様なものゝことで、老いたる道者が寒空に向つて簡素な生活をして居るのを氣の毒に思ひ、兼ねて其の心事を點檢するつもりであらう、然るに道者は

「私は娘生袴を持つて居ります、御親切は忝けないが方丈へ御返し下さい」といつて辭した、敢へて他の點檢に與らずといふ見識である、本具の佛性を徹見して

居るから雲居和尚等の御指示は用不着であると跳ね付けた處は却々悔り難い、娘生袴は母親が慥へて呉れた股引といふ意味である、道者ばかりではない、天下何人も皆娘生袴を所持して居るが、可惜乎、いづれもそれを知らずに居る、雲居もさるものであるから一旦出したものをその儘引込める様な間拔けたことはせぬ、再び侍者を遣して問はせた。

「母親の生れぬ先は何を穿いて居つたか」

母親の生れぬ先から生きて居る人間がある譯のものではない等といふのは凡夫の妄見である、吾等は父母未生己前、混沌未分己前から生存して居る、これ所謂眞實の自己である、其の眞實の自己は全體何を穿いて居つたぞといふ質問である、茲に到つて道者は答ふる術を知らず、唯黙々として居つたが、幾干もなくして其の道者は遷化した、道徳堅固の清僧であつたと見えて遺骸を茶毘に付すると舍利が出たので、之を雲居和尚に示した、然るに雲居は

「たとひ舍利が四斗あらうが八斛あらうが、あの時轉身の一語を下すことが出来ぬ

様な坊主が何になるものか」

一向願みも爲なかつたが、かく語の荒いのは却つて中に幾らか其の者を肯いた趣があるのが宗師家の常である、雲居も娘生袴ありと言つて一旦はね付けた態度を肯いたものとも見える。

一切聲是れ佛聲

投子義青和尚に或僧が問ふて、

「一切の聲は凡て佛聲といふことが出来ませうか」

蘇東坡は溪聲廣長舌山色清淨身といふた、世尊は我と山河大地と同時に成道と宣ふた、僧はそれと同じ立場から問端を起したものでらしい、投子は

「然り、其の通り」

と肯定せられた、和尚を毘に掛けやうと待ち構へた僧はこゝぞといふ勢で

「小便溜の煮へくり返る様な聲を御出しなされるな、つまらないことをいふて學人を

惑はしては困ります」

と罵つた、投子は之を聞いて間に髪を容れずビシヤリと一捧を僧の背中に喰はした、僧が向上に構へ込んで大威張りに威張つて居る鼻柱を挫いたのである、それでも尙ほ屈せず

「龜言細語第一義に歸すといふことがあるが眞實ですか」

と第二問を浴せた、大々は方處を絶し細々は無間に入るといふのが諸法實相の端的であるといふからには、地球を丸呑にする様な大法螺も、蚤の翠丸を蟲目鏡で檢べる様な詮索も、畢竟第一義諦に歸するといふのは事實かとの問である、これも投子を一杯箝めやうといふ油断のならぬ挨拶である、投子和尚は

「仰せの通り、決して古人のいふたことに間違はない」

と肯定した、

「それでは貴僧を一頭の「驢」と呼んでも差支はありませんか」

僧は果して陷虎の機を設けて居つたのである、師家を捕へて驢などは失禮千萬

な、それこそ龜言と云ふべきである、而し第一義に歸すといふてあるからには之を否む譯には行かぬ筈である、投子和尙は又ビシヤリと一捧を與へられた、此の捧即ち僧の執着を打破する爲の大慈悲の流露である、而し又僧が投子和尙の是を反面から拈弄したのを肯つた賞捧であると見るも可なりである。

梅子熟せり

大梅法常禪師は馬祖道一禪師の法を嗣いでから直ちに今の浙江省寧波府にある大梅山に庵居して二十年間只管に打座して居つた、馬祖は僧を遣して大梅の境界を探らせ

と僧が問ふと、大梅は「貴僧は馬祖和尙に就いて何の道理を悟つて斯様に山中に入られたか」

「馬祖和尙は袈に即心即佛といふことを以つて示された、そこで袈は其の道理を仔細に參究する爲に斯して打坐三昧に入つて居るのである」

と答へた、僧は

「近頃は馬祖山の佛法も大層變りました」

といふ、

「變つたとはどう變つたのか」

「近頃は馬祖和尙は非心非佛と申されます」

と僧は馬祖から授けられた毘にそろ／＼大梅和尙を陥れやうとする。けれども大梅の信念は堅い

「馬祖山の狸爺、可い加減人を誑すが可い、誰が何といふても袈はどこまでも即心即佛ぢや」

といつて頑として動かぬ、僧が歸つて馬祖に其の趣を報告すると馬祖はホク／＼と喜んで

「梅の實は愈々熟したぞ」

と大梅の境界の圓成したのを誇られた。

南泉茅を刈る

南泉普願和尚が秋晴の一日山の上で茅を拂つて居ると、通りかゝつた旅僧が南泉和尚とは知らずに

「南泉山へ行く道はどこでありますか」

と問ふた、和尚は持つて居た鎌を差し出して

「此の鎌を納は三十文で買つて来た、安いものぢや」

と殆ど取つても付かぬことをいふ、苟も修業者と見れば直ちに勘辨せずには居られぬのが宗師家たるもの、慈悲である、僧はまだそれに氣が着かぬ、此の老人豊かなとも思つたであらう、一段と聲を張り上げて

「鎌を幾干で買つたと問ふて居るのではありません、南泉山へ行く道をお尋ねするのです」

といふた、和尚今度も又空惚けた顔で

「此の鎌は實に使ひ好いよ、全く買ひ當てたわい」と言ふた。

僧は矢張茫然として居る、何處かでけたましく鶴が啼いた、和尚は一鳥啼いて山更に幽なりといふ趣を味ふかの様に澄渡つた空を仰いだ。

雪峯僧を踏倒す

雪峯義存禪師は三金投子九至洞山といふて、修行には非常に努力せられた師家である、古人は皆今時の參禪者の様に一時間か二時間坐禪をしてそれで悟らうといふ様な蟲の好い考を抱いて居なかつた。

或時雪峯和尚が薪取りに行つて藤を一束背負つて山坂を下つて來られたが、路で一人の僧に逢ふと藤の束を抛け出して又手して立つた、僧が代つて擔へといふ意味かと思つて藤の束を取らうとすると、和尚はイキナリ僧を押し倒して踏み躪つた、而して寺へ歸つてから長生といふものに其の話をして

「今日は實に愉快であつた、この僧を踏み倒してやつたが、こんな心持の可いことはない」

といふ、僧をして箇の一大事を會得せしめやうといふ慈悲の涙は瀉腸より流出して居るが而かも其の語は頗る粗暴である、長生之を聞いて

「雪峯和尚、貴僧は此の僧の代りに涅槃堂へ入らねばなりませんぞ、瑕我をしたのは踏倒された僧ではなくて踏み倒した貴僧でありますぞ」

と注意をした、薪の束を投げ出したり、僧を無暗に踏み蹂つたりするのは假設學人接化の手段としても畢竟無用の閑手脚を弄するものといふべきで、清淨の佛法を穢す罪によつて當然病を受けねばならぬ、涅槃堂は叢林に於ける病室である。

雪峯は長生の諫を聞いて其の儘黙つて退かれた、長生の諫是か、雪峯の作略非か、それは各人の實參實究に俟つて知る外はあるまい。

趙州の石橋

趙州從諗禪師は南泉座下に於ける俊髦で、出藍の譽ある宗師家である、曾て南泉が大衆の爲に猫を斬つた時、事はてた後へ來た趙州に意見を徵すると、趙州は草鞋を頭に戴せて去つたといふ話は頗る有名なもので、此の一事でも趙州が如何に超宗越格、自由無碍の活作略を有したかを知ることが出来る。

此の趙州の處へ新に來た僧があつた、趙州に初めて相見した時

「久しく三名橋の一たる趙州の石橋といふことを耳にして居たが、來て見れば意外に平凡な丸木橋であつた」

といふて暗に趙州に法戰を挑んだ、趙州は優しく

「お前は丸木橋ばかりを見てまだ眞の石橋を見ないのであらう」

と軽くあしらつた、優しい様でも言中に響がある、お前はまた慈悲の一面のみを見て威光の半面を見ないから、その様な鼻柱の強いことがいはれるのであるといふ意味の挨拶である。

「それでは石橋はどの様なものでありますか」

と僧は今度は穩かに問ふて來た、趙州は

「石橋は馬も渡れば驢馬も渡る、別段異つたことはない、雨がふれば濕ひ日が照れば乾く、これが石橋の眞面目ぢや」

と答へた、僧は更に問ふた。

「然らば丸木橋とはどの様なものでありますか」

「丸木橋は馬や車は通らぬが人間が一人一人通る、これとて別に異つたことはない、お前にも解り切つて居る筈ぢや」

と趙州は先には石橋と略物と何か大層異つた處がある様に、石橋を見て略物を見ずといつたが此處では僧が差別の見到執着しさうであるので其の妄を拂はんが爲に斯様に答へられた、此處が趙州の作略の自由無碍な處である。

世の爲には親疎はない

本阿彌光悦は萬能の人であつた、家は刀劔の磨礪鑿定を業としたが、光悦自らは

平安三筆の一人として能書の譽高く、陶器の製作、漆器の蒔繪に非凡の手腕を現はし殊に畫は光悦風と稱する一家を成した程であつた、かゝる才人を生んだ母も又才智勝れた人で、殊に女に似氣なく小事に拘泥せず飘逸磊落な性格は頗る禪僧の趣があつた、常に

「親子兄弟は餘り近い處に住んでは恩愛にも慣れて良くないものである、遠くこそ花の香の如くゆかしいものであるが近ければ奴婢等も往來して兎角の噂をするのが五月蠅いものである、又火事等の時にも一時に災を受けて避ける先もない様なことになるものである」

と語つた、或時孫婿の家に火事があつて土藏に火が入つたのを見て

「やれ〜お目出度いことである」といふので光悦が

「母上としたことが、人の災を喜ぶとは怪しからぬ」と答めると

「いや、普通の家ならば氣の毒にも思ふけれど、我が身内ながらあの家は代々貪慾揃ひで、他人の財物を抵當にして非道の利を貪つてあの様に富み榮えて居る何か大きな災難がなければ可いと思つて居つたが、不義にして積んだ財寶が焼けて、それ丈で罪業が消滅するならばこれ程結構なことはない」と答へたといふ、追がに一代の才人光悦が母ほどあつて、親疎恩怨の凡情に囚はれぬ所は嘆賞に價するものである。

一休禪師の母

「我等娑婆の縁盡き、無爲の都に赴き候、御身善き出家になり給ひ、佛性の見を磨き、其の眼より我等地獄に落つるか落ちざるか、不斷添ふか添はざるかを見たまふべし、釋迦、達摩をも奴となし給ふ程の人になり給ひ候は、俗にても苦しからず候、佛四十年説法し給ひ、つひに一字不説と宣ひし上は我と見、我と悟るが肝要に候、何事も莫妄想、かしこ

九月六日

不生不死の身

千菊どのへ

かへすくも方便のせつのみ守る人はくそ蟲と同じに候、八萬の諸聖教をよみても佛性の見をみがかずんば此の文ほどの事も解し難かるべし」

これとてもかりそめならぬわかれては

かたみとも見よみづくきのあと

これは古今の禪匠、絶代の奇僧一休禪師の母御が、禪師幼少の頃に書き送られし文である、此の母にして此の子あり、誠に禪師が自由無碍の大解脱境に遊化するを得るに至つたのも一面にかゝる賢母の督勵があつたからである。

一休禪師と蛸

一休禪師は僧形の身でありながら殊の外蛸を好まれた、或日蛸を買ひ遣つた使の歸が遅いのでまちあぐんで

此のたびはいそぐといふにながそでの

たこの入道みちのおそさよ

と詠んだ所へ使が歸つて来た、一休禪師は早速喰はうとしたが、いやまて暫し、縁あつて我が口に入らんとするもの、せめて引導でも授けてやらうと

千手観音蝟手多

斬懸ニ抽酢ニ拜ニ如何

佐州一味天然別

他禁戒任ニ老釋迦

といふ一偈を唱へた、やがて其の蝟を喰ひ終つて擅越の請に應じて酒肴の馳走に遇つたが、餘り飲み過ぎて先刻寺で喰つた蝟を皆吐き出して終つた、擅家のものが驚いて「今までは生佛の様に思つて居たが蝟を食ふとは呆れ果てた生臭坊主である」と罵つたが禪師は一向平氣なもので

「イヤ衲は蝟等は喰はぬが口から出たものは致し方がない、併し衲は決して喰つた覺はない」

といひ張つたが一同のものは却々承知せぬ、暫らく喰つた喰はぬの争をして居たが禪

師は

「喰はぬ口から出た實例を示してやらう」

と近所から善導大師の畫像を取りよせて

「あれを御覽せよ、善導大師は阿彌陀様を喰つたことはない、けれども口から三尊の彌陀を出して居らるゝではないか、善導大師でさへも喰はぬものゝ口から出るのを止めることが出来なかつたから、衲が喰はぬ蝟の口から出るのも致し方がないではないか」

と巧に言ひぬけたといふ、俗説取るに足らぬといへばそれまでいあるけれども、禪師が磊落不羈、事に當つて宛轉自在の作略を現せられた風貌を忍ぶに足る話ではないか。

繪に描いた虎

一休禪師が或大名の處へ行くと大名は傍に虎を描いた衝立のあるのを指して

「一休和尚、貴僧の智慧で此の虎を縛つて呉れぬか」

といふ、一休之を聞いて速時に

「如何にも縛りませう、縛るには繩を少々拜借致したい」といつて繩を借り、衝立の前に立つて身構して

「サア近習の衆、其の虎を逐ひ出して下され、拙僧が一番手捕りに致さうから」といつた、

遠の大名も其の當意即妙の作略には舌を卷いたといふ、これが禪ではない、禪ではないがこれも禪機でないともいはれぬ。

顔を烙いた了然尼

參禪學道には熾烈なる願心が無くてはならぬ、二祖慧可は雪中に臂を断ち、六祖慧能は堆房裏に苦修練行した。

了然尼、俗名をふさといひ、武田信玄の曾孫である、父は爲久といつて京都泉涌寺の畔に閑居して茶事を樂しみ、傍ら古書畫の鑑定をして世を送つて居つた、ふさは東

福門院に仕へてやどり木と稱ばれ、女御逝去の後は父の許に歸つて居つたが、父を初め人々の切に婚姻を勸むるまゝに、三人の子を擧げたら出家すると約して松田某に婚いだ、二十六歳までに恰と三子を擧げたので、幾子もなく夫の家を辭して江戸駒込に伯翁和尚を訪ひ、其の弟子とならうとしたが、伯翁和尚つくづくと其の容貌の美しいのを見て、到底學道の目的を達することは出来まいからといつて切に乞ふても許さなかつた、ふさは止むを得ず近隣の商家に退いて夜半竊かに金を焼いて、可惜花をあざむく顔を惜げもなく傷けて終つた、而して鏡の裏に、

昔遊三宮裏一燒三蘭麝
今入三禪床一燎三面皮

四序展行亦如此
不知誰是箇中移

と書いて其の志を伯翁和尚に示した、和尚は其の志氣の堅固なるに感じて隨徒たることを許し、名を了然尼と改めさせた、了然尼は其後和尚に就いて深く佛道の玄旨を探り、又鎌倉の諸禪刹を訪ふて心地の鍛鍊に努め、晩年武藏落合村に泰雲寺を建て、後又蓮乘院を建てた、正徳元年、六十六歳を以つて入定する時の遺偈に

六十六年秋已久 漂然月色向人明
 莫言那裡工夫事 耳聾松杉風外聲
 とある、誠に了然尼の如きは古佛にも愧ぢざる所の道念熾烈なる優婆羅華といふべきであつた。

芭蕉翁の辭世

芭蕉翁が行脚中に病んだ時

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

といふ句を詠んだが、それは改めて作つた辭世ではない、翁の病頗る重く、最早再起の望がないと定つた時、枕邊に侍した門人達が辭世の句を請ふと、翁は莞爾として「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世ぢや、自分がこれまで詠み捨てた句は一として辭世の句でないものはない、若しも後に人が桃青が辭世の句はと問ふたら一生涯の句が皆辭世ぢやといふてくれ」

といふた、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐のふかぬものかはといふ、定めなき世に定めなき命を持つた身には、折にふれての一言一行も盡く忽緒にすべきではない、されば芭蕉翁が作には一句として生命の籠らぬものはない、いづれも皆自然と人生の秘奥に觸れた力あるものばかりであつた。

物外和尚と近藤勇

物外和尚は強力を以つて知られた禪僧であつた、伊豫の松山藩士の家を生れて頗る武藝に達して居つたが、出家してからは興聖寺、永平寺等に掛塔して道力を養ひ、體力、武術、膽力兼ね備ふに到つた。

諸國を行脚する中、京都に滞在して居つた時の事である、其頃幕府の權力漸く衰へて勤王の士諸處に起り、世は何となく騒々しく、殊に京都は禍亂の中心であつた、諸方から入り込んだ浪士は慄汗亂暴殆ど手の付けられぬものがあつたが、殊に近藤勇の率ゐる新選組の浪士は其の甚しいものであつた、物外或日街を通ると新選組の屯で

頻に竹刀の音がするので、好きな道とて何気なく窓から一寸覗くと、それを見つけた一人が物外和尚を捕へて

「無禮者め、こちらへ来い」

と無理無態に道場へ引すり込んだ、物外が種々と詫びたけれども、浪士達は坊主を弄ぶのも亦一興と

「此處を窺くからには斯の道に覚えがあらう、是非一番勝負をしろ」

と迫つた、物外止むを得ず持ち合せの鐵如意を把つて立ち合つたが、一人として物外に敵するものはなく、忽ちの間に數十人の浪士は打ち伏せられた、之を見た頭領近藤勇は己れ小癩な坊主めと長押に掛つた木鎗おつ取つて

「和尚の手並感じ入つた、却々若者共の及ぶ處でない、此の上は拙者自ら御相手致さう」

と威丈高になつて睨み付けた、物外甚だ驚縮の様子をして

「これはしたり、幼少の頃に覺えたホンの猿真似、どうして先生等に手向ひが出来

ませうぞ、其の儀は平に御許が願ひたい」

と只管辭したが、近藤いづかな聴き入れぬ、そこで物外は件の鐵如意を把つて立ち合はうとすると近藤は

「凡そ武術を闘はずに、定つた道具がある、和尚も竹刀か木鎗を用ひられよ」

といふ、物外は

「お言葉尤であるが出家には武器は禁物、如意で宜しからねば之でも用ひませう」

と二つの鉢の子をとり出して左右の手に持つてイザとばかり立ち合つた、近藤は此奴益小面憎き所行を致すと心中大に怒つて隙をねらつたが、和尚の全身二つの鉢の子に隠れて寸分の隙もない、やがてチラリと見えた隙へ力を籠めて突き込むと、ヒラリと體をかはして蛭卷の處を兩の鉢の子でピタリと挟んだ、近藤は失策つたとばかり鎗を引かうとしたが最早金輪際動かばこそ、全身汗にまみれて引いて見たがビクともせぬ、物外和尚は近藤が散々苦しんで居るのを見てパツと鉢の子を開いて鎗を放した、近藤は始めて我に歸つて

「並々ならぬ腕前恐れ入つてござる、失禮ながら貴僧は何人でござるか」と懇懃に尋ねた、物外和尚も厚く禮を返して

「拙僧は備後尾の道の物外と申す」

と應へた、近藤も兼ねて其の名は聞いて居つたが、其の力倆技術のかくばかりであらうとは始めて知つて厚く其の日の無禮を謝すると、和尚も懇々と其の部下の粗暴なることを戒めて漂然として立ち去つたといふ。

雷の力で蚊張の一重かな

禪門の豪傑僧物外和尚と同時代に安藝の一滴齋といふがあつた、物外和尚の高名を聞いて一度其の鼻を取り挫いでくれんと思つて居た、或時何氣なく物外和尚を訪問すると和尚はイキナリ

「何にしに來た」

といふ、一滴齋間に髪を容れず真正直に

「和尚を殺しに來た」

と答へた、物外其の眞率にして奇抜な答へを聞いて一滴齋の人となりを愛し、寺に留めて禪を談じ劍を競はせた、或時一滴齋に

雷の力も蚊帳の一重かな

といふ一句を示して

「これが我が門の奥儀である」

といふた、物外と一滴齋と、其の技倆に於いては甲乙はなかつたが、而かも尚ほ越ゆべからざる一重の距があつたのは、和尚は乾坤と一如する底の大解脱を得て居つたが一滴齋にはそれがなかつたからである、蓋し物外の秀れて強かつた所以は其の道力にあるのである。

提唱に糝糠はない

雪潭紹璞は紀伊に生れ伊深の正眼寺に住した幕末著名の禪匠である、慶應三年に孝

明(みん)天皇(てんのう)から眞(しん)如(にょ)明(めい)覺(がく)禪(ぜん)師(じ)の諡(し)號(ごう)を賜(たま)ひ、明(めい)治(じ)六(ろく)年(ねん)七(しち)十(じゅう)三(さん)歲(さい)を以(も)つて遷(せん)化(げ)した。
 嘗(かつ)て尾(び)州(しゅう)犬(いぬ)山(やま)瑞(ずい)泉(せん)寺(じ)の請(こひ)に應(おう)じて臨(りん)濟(ぎ)録(ろく)を講(かう)じた時(とき)、犬(いぬ)山(やま)城(じょう)主(しゅ)成(せい)瀨(せい)侯(こう)も其(そ)の席(せき)に臨(りん)んで提(てい)唱(じやう)を聴(き)いたが、其(そ)の座(ざ)席(せき)は簾(すだれ)を距(へだ)てた一段(だん)高(たか)い所(ところ)にあつた、雪(せつ)潭(たん)和(わ)尚(じやう)之(これ)を其(そ)の法(はふ)を輕(かろ)んじ學(がく)者(しや)に對(たい)する禮(らい)を缺(か)くを憤(いきどほ)つて、講(かう)座(ざ)の(うへ)上(かみ)から憚(はば)かる所(ところ)なく言(い)ひ放(はな)つた。

「此(こ)の雪(せつ)潭(たん)の提(てい)唱(じやう)には糺(こ)練(れん)はない、篩(ふる)ひに掛(か)けて聴(き)くとは何(なに)事(こと)ぢや、老(わ)衲(にやく)に對(たい)する禮(らい)は兎(と)も角(かく)、佛(ぶつ)祖(そ)の法(はふ)を輕(かろ)んずるものがあつては講(かう)ずる譯(わけ)には參(まゐ)らぬ」
 一(いち)座(ざ)色(いろ)を失(しつ)して後(こう)難(なん)を懼(おそ)れたが、犬(いぬ)山(やま)侯(こう)は之(これ)を聞(き)いて其(そ)の非(ひ)を覺(さと)り、簾(すだれ)を徹(てつ)し席(せき)を下(さ)つて謹(つし)んで聴(き)いたといふ、眼(がん)中(ちゆう)王(わう)侯(こう)貴(き)人(じん)なく、法(はふ)を説(と)くに當(あた)つては主(しゅ)中(ちゆう)の主(しゅ)となつて毫(かう)も他(た)に讓(うづ)らざる見(けん)識(しき)を持(ぢ)する所(ところ)、雪(せつ)潭(たん)和(わ)尚(じやう)は全(ぜん)く禪(ぜん)僧(そう)らしい禪(ぜん)僧(そう)であつた。

奕(えき)堂(だう)禪(ぜん)師(じ)の禿(かぶ)頭(とう)

維(い)新(しん)當(だう)時(じ)に永(えい)平(へい)寺(じ)の貫(くわん)首(しゆ)であつた奕(えき)堂(だう)禪(ぜん)師(じ)は頭(あたま)が強(ひと)く禿(かぶ)げて居(を)つた、或(ある)時(とき)の法(はふ)戰(せん)に

これ(こ)れも矢(や)張(はり)頭(あたま)の禿(かぶ)げ(げ)た一(みやう)明(めい)といふ坊(ぼう)さん(さん)が自(じ)分(ぶん)の事(こと)は忘(わす)れて終(しま)つて禪(ぜん)師(じ)の頭(あたま)が光(ひかり)つて居(を)るから一(ひと)つ戯(から)か(か)つて見(み)やうと思(おも)つて

「如何(いか)なるか是(こ)れ諸(しよ)佛(ぶつ)の光(くわう)明(めい)」

と問(と)ふと、禪(ぜん)師(じ)は間(かん)に髮(はつ)を容(い)れず

「汝(なんぢ)が頂(ちやう)額(がく)とい(い)づれぞ」

と答(こた)へて却(かへ)つて一(みやう)明(めい)に逆(さか)捻(ねじ)を喰(く)はしたから一(みやう)明(めい)も二(に)の句(く)が繼(つ)げず、

「尊(そん)答(たふ)を謝(しゃ)し奉(たてまつ)る」

で其(そ)の場(ば)は退(しりぞ)いたが、坊(ぼう)さん後(あと)で口(くち)惜(やく)しく堪(た)まらず、次(つぎ)に商(しやう)量(りやう)のあつた時(とき)に又(また)

「如何(いか)なるか是(こ)れ諸(しよ)佛(ぶつ)の光(くわう)明(めい)」

とやつた、禪(ぜん)師(じ)は前(まへ)の事(こと)はスツカリ忘(わす)れて居(を)たから何(なに)氣(げ)なく前(まへ)と同(おな)じ様(やう)な答(こた)へをせら

れると、一(みやう)明(めい)はスカさず

「恁(いん)麼(ま)なら(ら)ば和(わ)尚(じやう)と同(どう)參(さん)」

と酬(ひく)ひた、禪(ぜん)師(じ)は始(はじめ)て一(みやう)明(めい)に一杯(いぱい)喰(く)された事(こと)を悟(さと)られたが、最(も)早(はや)後(あと)の祭(まつり)で仕(しかた)が

ないので

「却つて傍人の爲に一笑せらる」

と笑つて答へられたといふ、同参といふけれども一明の禿頭の光明と奕堂禪師の禿頭の光明とはそれく光度が違つて居る、三世諸佛各特殊の光明を放ち、人々個々別々一家風を具へて居る、生佛不二とか佛祖と同参などいふことを妄信するのは所謂味増糞混同の惡平等に墮在するものといふべきである。

勝海舟の一喝

勝海舟が京都に居つた時、勤王黨のものが海舟を暗殺せんとしてつけねらつた、或時四條通を歩いて居ると物陰に覆面した一人の男が隠れて居つて、銃口を海舟に向け、て今や火蓋を切らんとして居る、海舟大に驚いたが、勵聲一番件の曲者に向つて

「それくまるで的が外れて居る、そんなことで俺が打てるものか」

と罵つた、其の態度の如何にも泰然自若たるには追がの刺客も度膽を抜かれたと見え

銃弾も放たずにコンくと逃げ去つたといふ、海舟は島田虎之助に就いて劍道の奥儀を極め、又島田の誘導で牛島の廣徳寺に永く参禪して心膽を鍊つた爲に、斯の如く事に臨んで不動着なる大精神を養ふことが出来たのである。

橋本獨山と大黒

橋本獨山和尚が曾て天龍寺に居つた時、或人が大黒天の畫像を書くことを依頼した而して曰ふには

「アノ大黒頭巾といふ奴は餘り不恰好なものであるから頭巾を被らぬ大黒をお願ひ致したいものである」

といふ、獨山和尚には大いに困つて遂に峨山和尚の處へ相談に行つた、すると傍に一人の雜僧が居つて

「頭巾を被らない大黒は丸鬚に結つて居ます」

と云つた、獨山と峨山相顧みて苦笑する外はなかつたといふ。

越溪和尚の説教

好心寺の越溪和尚は豪放な人であつたが説教演説は赤つ下手であつた、維新の始めに教導の制が設けられて誰でも説教をせなければならぬことになつたので、越溪和尚も止むを得ず説教の上手な龍關といふ人に草稿を書かせてそれを高座で読み上げた、聴衆は一向感動する様子がない、偶々愁嘆場になつて龍關和尚が「こゝは泣く處」と注釋して置いたのまで大聲で読み上げたので、一同クス／＼笑ひ出して終つた、越溪和尚怪訝な顔をして

「龍關が此の話をすると皆が泣くが、衲がやると一向泣かないが、どういふ譯ぢやな」

といふた、其の顔が頗る眞面目であつたので一同は到頭ふき出して終つた。

それでも談議僧の龍關を越溪和尚よりも尊敬するものはなかつた、越溪和尚の聲望は一層高まるばかりであつた。

渡邊南隱和尚の金時計

渡邊南隱和尚は濟門近代の名僧であつた、晩年は東京白山龍雲院に寓居して錫素を接化せられたが、明治三十七年七十一歳で遷化せられた、眞率、温健、所謂臨濟風の放漫な所は毫もなかつた。

和尚は平生時計は五月蠅いものだといつて携帯しなかつたが、或日某が机の上に立派な金時計の載つて居るのを見て不思議に思つて尋ねると

「ウン、これか、これは某氏の後室が呉れたのぢや」

「老師は時計をお持ちにならぬ主義ぢやと聞きました」

「實は、後室の邸で毎週一回法話をする事になつて居るが、寺には時計がないのでいつも定つた時間に行つたことがないから、後室がこれくれたのさ」

といふ、其の後某が机の上を見ると今度は粗末な時計が載つて居る、「先の時計はどうなさいました」と尋ねると

「あれは某の勉學の資にしてやつたよ、そしたら今度は他人に呉れない様に悪いのを遣るといふて此を後室から贈られた」といつてカラ〜と笑つた。

死ぬに心配は要らぬ

南隱和尚或時信者の病床を訪ふて

「死ぬことには心配は要らぬぞエ、皆獨で死ぬるからの、併し此の歌丈は覺えて置くが可い

寢た間のみ人にかはらぬ思ひ出を

浮世にかくす曉の鐘

考へて見や、腹一ぱい喰べて寢込んだ時は天子様でも三井岩崎でも、又橋の下の乞食でも變はないが、曉の鐘がゴーンと鳴ると皆々浮世に歸つてそれ〜異つた苦勞をするのぢや」

と懇に訓された。

自信と自惚

人々は自信がなくてはならぬ、併し乍ら自信も過ぎて自惚となつては却つて有害なもの、他の笑を招く基となるのであるから大いに注意せねばならぬ。

往年亞米利加に世界博覽會の開設せられた際、米國から我が國に人を派して純日本産の馬を買ひ取つて行くと聞いた或人、大得意になつて

「それ見たことか、馬匹の改良等といふて歐州産の馬ばかり良いものゝ様にいふが矢張我が國の馬が良いから態々米國から種馬を購ひに來たではないか」

といつて悦んで居た、然るに何ぞ知らん米國では改良を加へない所謂原馬と改良を加へた馬を博覽會に陳列して良否の差を公衆に示さうとしたが原馬は何處にもない、日本馬が最も劣等であつたから原馬として陳列する爲に買取つたのであつた、茲に於いて曩に自惚れた人も殆ど顔色がなかつたといふ。

大晦日の稽古始め

思ひ立つたが黄道吉日といふ、無際限の時間を際つて吉日といひ凶日といふのは畢竟人間が勝手に定めたものである、生死事大無常迅速で、壽命が盡きれば正月元日でも死に襲はれる、されば學問も信心も思ひ立つた日、思ひ立つた時に初めねばならぬ。

嘗得庵は林羅山の弟子であつたが、或年の大晦日の夜、師羅山を訪ふて種々の話の序で、來年からは通鑑綱目の講義が聞きたいといふと、羅山は

「己に通鑑綱目の講義を聴く必要を感じたら來年を待つ必要はない、斯様に雑談をして居る隙に一枚でも二枚でも講せらるではないか、早速今晚から初めなさい」といつて自ら書物を持ち出して読み初めたといふ、學者の眼中には正月も師走もない、寸陰分陰を惜んで刻苦精勵したものである。

劍客の念佛

禪の王三昧と念佛の三昧境とは別箇のものではない、本來の面目に相見するといふことは所謂彌陀の大慈に抱かれて無爲安樂の境に住することであるともいひ得る、されば古來秀れた念佛の行者は、身心脱落せる禪者に髣髴たるものが少くない。

昔、白井亭といふ劍客があつた、師匠に就いて劍道を學んで居る中に大に技倆が熟達したので、師匠に免許皆傳を願ふと、其の師範は

「甲斐に徳本行者といふがあつて念佛を修して居る、此の人に就いて奥儀を問へ」といふので、白井は遙々徳本行者を訪ねて劍道の奥儀を訪ねると、行者は

「私は念佛の行者ぢや、劍道の事等が解らう筈はない、併し折角來たものであるから私の念佛をお聴きなさい」

と白井を佛間へ導いて鐘を鳴して念佛を始めた、其の聲は深く白井の心肝に銘じて、全身一種の靈感に打たれ、知らずく劍道の秘術を會得した様に覺えて、爾來白井は

徳本行者に就いて念佛を修し、技術以外に不動の大信念を得、後に東京市外巢鴨村に徳本寺を建て、其の徳を彰した。

生死の巷に往來する劍客には、腕先の技術よりも精神力を養ふことが大切であつてそれは坐禪によつても念佛によりても、志氣さへ堅固なれば得られるのである。

澤庵禪師乗馬の秘訣

澤庵禪師が將軍家光に召されて品川東海寺に住してからは江戸詰の大名武士いづれも其の門に參じて接化を蒙つた、將軍の指南役柳生但馬守の如きも其の一人であつた。或時柳生但馬守が和尚を訪れて四方山の話の中、馬術の話が出た。

「拙者は愛宕山は乗馬の儘で登るには難なく登つたが下りはどうしても出来なかつた」

と但馬の守が話すと、澤庵和尚は

「成程、降りには難しいとは聞いて居つたが貴殿程の人にも出来ませぬかな、元來馬

術の上には鞍上人無く鞍下に馬なしといふことを申すが實際その修業が出来て居ないと降りには難しい、何でも馬と人とが別々になつて居ては駄目ぢや、馬と人と一枚になる工夫は矢張坐禪によらなければならぬ」

といつた、但馬守は爾來寢食を忘れて工夫の結果、大に心得する處があつて石段の昇降が自由に出来る様になつた。

文晁と田崎草雲

田崎草雲は又梅溪とも稱して加藤梅翁の門に學んだ、或年の正月、嘗て師事したところのある谷文晁の門を訪ふと、文晁は

「お前は今梅翁といふ梅の名人に就いて學んで居るから嘸ぞ梅を書くことが上手になつたであらう、一つ此處で描いて見ぬか」

といふ、草雲はいはれるまゝに梅を描いた、文晁は一目それを見て、

「何だこれでも梅を特別稽古したといふのか、此の様なものなら俺は足でも描く」

と口を極めて罵つたので、草雲大に憤慨して爾來専心一意業を勵んだ、草雲が歸つた後、文晁は金井烏洲に書を寄せて

「梅溪の氣概は愛すべきである、決して凡骨ではないから足下梅翁に遇つたら一層力を入れて導く様に囑んでくれ」

といつた、草雲は果して當時天下に名を知られる書家となつた、後に草雲は文晁の眞意を知り深く之を感謝したといふ。

西有穆山禪師と日置黙仙禪師

西有穆山禪師は洞門近代の善知識として現代其の鑿鑿を受けた人が頗る多い、曹洞宗大本山總持寺の貫首となり、後横濱に西有寺を建て、隱退してからも學人の提撕に努められた人である。

或年の正月、横濱の實業家大谷嘉兵衛氏の宅で今の永平寺貫首日置黙仙禪師と相會したことがある、其の時、日置禪師は西有老禪師に向つて

「老僧と拙僧とは師弟も管ならぬ程淺からぬ因縁があります、それで拙僧が先へ死んだら老僧が引導を渡して下さい、又老僧の方が先であつたら拙僧がお經を読みます」

と云つた、其の場は西有禪師も格別何にも言はれなかつたが、後に二人きりの對座になつた時、日置禪師に向つて

「在家の人の前で、而かも正月にあんなことをいふものでない、死んだらなんて在家のものは縁起を氣にするものぢやからよく氣をつけるが可い、物も言ひ様でよくも悪くもなるもので、あれを、死んだらと云はずに若し生き残つたらと云へば同じことでも縁起がよかつたのに」

といはれた、當時六十幾つといふ日置禪師も西有禪師の目には若いもの、様に思はれて居つたであらうが、殊に綿密を旨とする曹洞禪の巨匠である丈に、誠に其の訓誡は懇切丁寧なものであつた。

不具の子程可愛い

盤珪和尚といふは石洲濱田の城主京極家の歸依を受けて龍門寺といふ寺の開山となつた人である、或制中に多くの僧が集つた中に手癖の悪いものが居て大衆の金品が屢々紛失した、大方目星が付いて居るので大衆が盤珪和尚に迫つて其の僧を下山させ様としたが盤珪和尚中々實行せぬ、大衆は遂に堪へ兼ねて「あの僧を處分せられねば吾々一同が下山します」といふと、和尚は

「マア〜さう怒つては困る、衲はお前達の様な立派な人間よりもあの様な不具のものを一人前にしてやりたいばかりに我慢をして時節を待つて居るのぢや」といふた、これを漏れ聞いた件の賊僧は翻然として改悟したといふ。

本職が大切

觀世又次郎は鼓の名人である、然るに人物が何となく輕卒で浮々して居る、親しい

友がそれを忠告すると

「御親切に忠告して下さつて有難い、世間では拙者のことを阿呆といふかも知れぬ、輕卒者と笑ふかも知れぬ、併し拙者の鼓を拙いといふ人があるはしませぬか」

と心配氣にいふ、友人は

「イヤ鼓に於いては確かに天下一品、誰とて非も打つものはござらぬ」といふと觀世は蘇つた様に嬉しさうな顔をして

「それ聞いて安堵した、自分の本職さへ非を打たれねば拙者は何より満足でござる、併し平生の行爲も出来る丈は注意致さう」

と云つた、技藝を以つて身を立てるものには技藝が生命である、自己特有の面目を發揮すれば些細な人格上の缺陷は充分補ふことが出来る、大功は細瑣を顧すとは或程度までの眞理である。

坦山和尚の蟲干

原坦山和尚は加藤弘之博士に請せられて淺草の巷間から帝國大學へ通つて印度哲學を講じた近代の禪匠である、一年北越行脚の砌、和尚の宿所の近所の富豪が箆筒長持を空敲きにして綾羅錦繡を處狭きまで並べて蟲干をした、近所の貧民の女房や娘達は其の美しさ結構さに眩惑せられて羨しさに喧しく品評をして居る、和尚は之を見て自分の行籠から粗末な古着を取り出して高々と竿をの先へ釣し、隣の富豪の衣裳と並べた、道行く人や女房連が可笑がつて居るのを見て

「今日は好い天氣で隣でも蟲干をしたから袷もした、袷は心の蟲干は怠らずやつて居るが着物の蟲干は始めてぢや、袷は着物の数が少いから手間もかゝらぬが隣の様な物持ちでは心の蟲干までは手が廻るまい」といつてカラ〜と笑つた。

武士には武士の務がある

長崎に蘭を描くを得意とした畫僧があつた、姓を日高、名を鐵翁といつて長崎春徳寺に住し、明治四年八十二歳で遷化した人である。

鐵翁の畫名廣く天下に傳はるに及んで其の門に學ぶもの頗る多く、貫名菘翁、日根對山、前田暢山等いづれも鐵中の錚々たるものであつた、鐵翁は常に次の如く弟子を誡めた。

「錢舜舉の語に、要得無求於世、不下以毀譽撓懷とあるが、これは吾々が座右の銘とすべきぢや、胸中一點の俗氣なければ技倆も自然に圓熟して玄妙に達することが出来る」

或時久留米公の藩士某といふものが鐵翁を訪ふて

「藩士の命を奉じて書を學ばんとするものである、どうか門弟にして貰ひたい」と頼み込んだ、鐵翁は武士は書を以つて公に奉すべきものではない、武士には武士の

本分がある、蘭を置くこと等を習つて何になるものかといつて取り合はぬ、件の武士は再三再四禮を厚うし語を盡して請ふたが鐵翁は言を左右に托してどうしても許さず武士も遂に腹を立て、

「一箇の武士が斯程までに辭を盡して頼むのにさしたる理由もなくして望を容れぬとは餘りといへば餘りである、此の上は拙者にも覺悟がある」と憤然として意を決する處あるが如く見えた、されど鐵翁は平然として

「今や尊王攘夷の議論轟々として皇國は危急存亡の秋ぢや、此の時に當つて臣民たるもの盡く立つて王事に盡さねばならぬ、然るに身苟も藉を士に置くものが悠々書畫を學ぶ等とは以つての外ぢや、覺悟があれば覺悟通りに決行せられよ、たとひ此の鐵翁の首を得ることは出来ても鐵翁の蘭を得ることは出来まい」と云ひ放つた、件の武士は之を聞いて驕然として悟り、厚く其の無禮を謝して立ち去つた、鐵翁は實に凡庸の弄筆者流ではなかつた。

一榮一落是春秋

東風ふかば句おこせよ梅の花

主なしとて春なわすれぞ

と一首の歌を残して、花の都を後に、遙々筑紫のはてに落ちて行く菅原道真は、内海の波美しき明石の驛に、一夜の宿をとつて憂きこと繁き旅路に、せめてものなつかしき思ひ出のたねを残さうとした、明石の驛長は、菅公が藤原時平等の讒に遇ふて罪なきに配所の月を見んとするを悲しんで、様々に慰めた、菅公は此の度の貶黜を心うきことには思つたけれども、法皇をさへ煩はして冤を解くことに努めても及ばなかつた程であるから、最早悲しみなげいても詮なきことと思ひ定めての上であるから、驛長の切なる心づくしを却つて氣の毒に思つて

驛長無悲時變改 一榮一落是春秋

と書いて示した、彼も一時是も一時、廟堂に立つて時めくも、西海のはてに憂き月日

を送るも、いづれも皆因縁會遇、草木の春秋毎に榮枯する様なものである、何をか悲しみ何をか驚くべきといふのである、菅公は佛法を知つて未だ禪を知らなかつたが、其の苦樂を超越した境界は優に禪の堂奥に入つたものといふも敢て不當ではない。

北條時頼の治績

北條時頼は武門の統領中稀に見る公正仁慈の君子人で、天下を治むるに細心な注意を拂つて大いに勤儉清廉の風を鼓吹した、深く佛法に歸依し、殊に禪道の造詣頗る深きものがあつたのは、其の民に臨むに仁慈にして國法を行ふに公正であつた所以である、宋僧道隆を請して建長寺の住持としたり、拇尾の明惠上人に就いて心要を聴いたこと等は廣く世に知られて居る、薙髮して道察と號し、又最明寺入道と稱せられ、職を辭してからは身を雲水の姿に宴し、漂然として天下に放浪し四方に行脚して、民情を察し、治績を點檢した、若し冤罪や苛斂に苦むものがあれば

「衲は嘗て鎌倉幕府に仕へたものである、お前が其の様な不法な苦を受けて居る

のは甚だ氣の毒である、衲が書面を書いてやるから幕府に訴へるが可い」

といつて自ら訴狀を書き與へて幕府をして賞罰を明にせしめた、薨するに臨んで

業鏡 高懸 三十七年

一槌 擊碎 大道 坦然

といふ偈を遺した、時頼の如きは己に生前に於いて業鏡を擊碎して坦然たる佛祖の大道を濶歩して居つたものであつた。

青砥藤綱と牛の尿

時頼は青砥藤綱を卑賤から拔擢して重く用ひた、藤綱が若干の錢を水中に落して之を拾ふ爲に倍額の金を費したのを或人が笑つた時

「水中に落した錢を拾はずに置けばそれ丈天下の通寶を失ふ理である、今之を拾ふ爲に費した錢は只我が囊中を去つたばかりで天下の富には何の増減もない」

と戒しめたといふ。

或年早あるとしひでりが續ついて人民が苦くるんだ、時頼ときよりは僧を請しやうして布施ふせを厚あつうして祈禱きたうさせ、又自分またじぶんで三島明神みしまみやうじんに參詣さんけいして雨を祈いのつた、其その途みちすがら青砥藤網あなとふぢつなは牛が水の中に尿しやうべんをするのを見て

「こら、貴様きさまも北條公ほつでうこうの眞似まねをするのか」

と叱しかつた、左右さいうのものが怪あやしんで其その理由りゆうを尋たづねると

「牛うしでも早ひでりで人が困こまつて居ゐることが解わかつて居ゐれば同じ尿しやうべんをするにも水みづの中なかへしなで田たの中なかにすべきである、北條公ほつでうこうが僧そうを供養くやうしたのは牛が水みづの中に尿しやうべんをした様なもので、清廉せいれんな僧侶そうりよは寧むしろ餓うゑても來こぬ、供養くやうを受けるのは貪婪どんらん飽あくことを知らぬ輩やからばかりである」

と答こたへた、誠まことに至し言げんといふべきである、藤網ふぢつなは僧行印そうぎやういんを師しとして深く佛法ぶつぽうの的てき旨しに通つじて居ゐつた程ほどあつて、其そのいふ所ところ其そのの爲なす所ところ何處どことなく俗流ぞくりうを超越てうあつした趣おもむきがある、所謂いわ禪機ぜんきを藏ざうする人ひとといふべきである。

轉た寝の夢

「五濁惡世ごじやくあくせいの我等われら、驕慢懈怠きやうまんけだいの念ねんしきりに進すすみ起おこり候まほらを拂はらはんと思おぼ召めし候まほらへ、妄想まう想さうは庭にはの草くさの如ごとくにて、いかに鋤すき捨すて候まほらとも根ねが絶たえぬ者ものにて候まほらを、幾度いくたびも心こころに入れて鋤すき捨すて候まほらへば、終しまひは繁しげらぬものにて候まほら如ごとく、筋すぢなき妄想まう妄念まう起おこり候まほらは、打うち拂はらはせ給たまひ候まほらへ候まほら、憂うれきこともいみじき事こと、唯轉た寝ねの夢ゆめにて候まほらへばそれを思おぼ召めし知しりて何事なにことも果敢はかなき世よに御心みこころを苦くるめ候まほらは、佛ほとけの道みちを違たがはせおはしまし候まほらべく候まほら」

これは藤原ふぢはら爲相ためあの母阿佛尼はあぶつにが鎌倉かまくらから西にしの國くになる娘むすめに送おくつた所謂いわゆる「乳母めのの文ぶん」である、阿佛尼あぶつには歌道かだうの名門めいもん大納言だいなごん爲家ためいへの室むろで、又北林きたばやし禪尼ぜんにともいつて和歌文章わかぶんしやうに巧たくみで、又少またからず禪ぜんの造詣ぞうけいもあつた女性にょしやうである、爲家ためいへの先妻せんさいの子こ爲氏ためうぢ、事ことを以もつつて父ちちの勘氣かんきを受け、領地りやうちも歌道かだうの家系かけいも共に遺言ゆいごんによつて阿佛尼あぶつにの生子しやうしためすけ爲相ためあに譲ゆづることとなつて居ゐつたのを、爲家ためいへの死後しご爲氏ためうぢが押領おしやうしたので阿佛尼あぶつには遙々はるく鎌倉かまくらに上のぼつて幕府はくふに訴うったへた

其の道すがらの日記は有名な十六夜日記で、子を思ひ家を思ふ綿々たる情緒が文字の上^{うへ}に流露^{りゅうろ}して居る、「憂きこともいみじきことも唯轉た寝の夢」と観じて、か弱い女の身の山河幾百里を距へた處へ、愛子を殘して鹿島立つたけな氣さは流石に北林禪尼の稱あるに恥ぢぬ。

中江藤樹と熊澤蕃山

熊澤蕃山は篤學至誠の人であつた、嘗て良師を求めて東西に遊方して一旅亭に泊つた、適々同宿の人が語つていふには

「拙者が嘗て主君の御用金二百兩を懐に入れて旅をした時、或處で驛馬に乗つて其の金を鞍に繋いだ儘忘れて馬を降り、宿で寢についてから思ひ出して大いに驚いたが馬子が何處のものやら分らぬので途方にくれて居ると、夜更けてから拙者の宿を訪れたものがある、不思議に思つて遇つて見るとそれは件の馬子であつた、馬子は家に歸つてから鞍に金袋が繋いであるのを發見して急いで此の驛に來

て諸方の宿を尋ねて漸く拙者を尋ね當てたのであるといつて、其の金子を拙者に渡した、拙者は夢かとはかり喜んで厚く謝禮をしやうとしたが馬子はいつかな受取らぬ、金を返すのは當然のことで謝禮を受くべき理由はない、折角の思召であるからこゝまで來た賃錢として二百文丈戴きませうといふので拙者も賤しき身分にも似ぬ其の清廉正直な志に感じて、どうして其の様に正直であるかと尋ねると、馬子は近所に中江藤樹といふ先生があつて、人としての務、人間の行ふべき道を教へられる、吾等は其の徳に化せられて幾干か人倫を辨へることが出來たと答へた、拙者は之を聞いて、定めし中江といふ先生は優れた學者であらうと思つた、貴殿も此の先生を訪ねられては如何」

と教へた、蕃山は痛くその好意を謝して急いで近江の小川村に藤樹先生を訪ねて入門を許されんことを請ふたが

「拙者は人の師たるに足るものではない」

といつて應諾せられぬ、再三請ふて漸く母堂の口添によりて許されたといふ、知を以

つて人を啓發することは難くはないが、徳を以つて無知の村民を感化すること藤樹先生の如きは蓋し稀であらう、近江聖人の稱ある、又宜なりといふべきである。

「天子より以つて庶人に至るまで、壹に是れ皆身を修むるを以つて本と爲す」

といふ大學の章句は、藤樹先生が發奮興起の動機であつたといふ、思ふに此の章句は先生が一生を通じての信條であつたであらう、而して先生は之を如實に躬行し實現せられた、禪の本旨とする處、又身を修むるにある、直下承當といひ、即身成佛といふ畢竟大學に所謂身を修むることに外ならぬのである。

俳 味 禪 味

俳句の領域と禪の境界とは頗る相近い、俳人の生活は正しく禪僧の解脱味を體得して居るものといふべきである、芭蕉翁が

もうくの心柳にまかすべし

といふ句は爲作造作に涉らぬ、任運無功用の端的を道破せるもの、嵐雪が

之もなく口上もなし粽五把

は、言端語端に涉らずして蕪直に當體を呈露したものと見られる。

なも佛蓮の臺も涼しかれ 芭蕉

誰れ人か、菰著ています花の春 同

聲よくば歌はんものを散る櫻 同

これ等は餘り人々に膾炙せぬ句であるけれども、俳人が眞如實相と融合して自由にそれを詩化して行く活作略が各自の上に現れて居る、殊に「なも佛」の一句の如きは信仰の妙諦を輕妙に表現し得た點に、非凡の手腕が窺はれるではないか。

俳句中興の英才と稱せられた天明時代の蕪村が、歳末に當つて債鬼に苦められ

首くゝる繩切れもなし年の暮

の一句に活路を開いたことや、芭蕉翁が

蛙とび込む水の音

の十二字を得て焦心熟慮して遂に「古池や」の五字を以つて門人等の付した冠句に代

へたが如き、いづれも俳人の禪機として頗る味ふべきものではないか、

桃水和尚の生涯

桃水和尚は近世禪門の奇僧である、名を雲關といつて、肥前島原禪林寺に住したが或年漂然として寺を去つて迹を韜まし、乞食となつて東西に流浪した、京都四條嶺に乞食の仲間になつて居つた時、偶々面識の比丘尼に遇つて衣類を貰つたが、直にこれを仲間の病人に與へて自分は相變らずの破衣を身にまとうて居つた、其後大津に行つて草履を齧いで日を送つたが或日法弟が公用を帯びて轎に乗つて大津を通り、偶然桃水和尚に遇つて轎を下りて窓に久澗を叙せんとしたが、和尚は唯一言「朱門に酔ふなよ」といひ捨てたまゝ後をも見ずに去つて終つた。

晩年に又京都に入つて行乞して歩いたのを兼て其の徳風を慕つて角倉某といふ豪商が供養せんとしたが辭して受けぬ、唯角倉の家で殘飯を貰ひ受けて、それで酢を醸し

て賣つた、鷹峯に住んで自ら酢屋道全といひ又は道念といつた、天和三年に七十餘歳で樂寂した、遺偈に曰く

七十餘年快哉、屎臭骨頭堪作三何用一矣、眞歸處作麼生、鷹峯月白風清、嘗て大津で草履賣をして居つた時、或人に大津繪の彌陀像を貰つて自分の小家に掛け、消炭で

せまけれど宿を貸すぞやあみだ殿
後生たのむとおぼしめすなよ

と書いた、恬淡にして無置碍なる生涯は、誠に方今の嗜慾貪婪、俗よりも俗なる僧侶に對する好箇の清凉劑である。

畫僧月仙

月仙は伊勢の畫僧である、畫を乞ふものがあれば必ず

「潤筆料は何程御出しなさる」

と問うて、廉ければ決して書かぬ、其の潤筆料は頗る高價であるが、金さへ出せば如何なる人の依頼でも平氣で引受けた、畫家仲間では乞食月仙といつて畫家の面汚しであるさへ罵るものもあつたが、月仙一向それには無頓着であつた、潤筆料が高くても畫に一種の風韻があつて珍重するものが頗る多かつたので月仙の門は大いに繁昌した、それを嫉んだもの、煽動か、但しは當人の發意であつたか、土地の一藝妓が月仙に書を依頼して、わざ／＼宴席へ月仙自身に畫を持參させ、潤筆料を放げ付たり、畫を腰巻にしたり、散々に侮辱したが月仙別に憤慨する様子もなく、平氣で潤筆料を受取つて歸つた。

池野大雅が伊勢に行つて月仙の寺に泊つた時、

「世間では貴僧を乞食月仙といふて居るそうだが、餘り潤筆料を貪るのは普通の畫家も愧づることである、まして僧侶としては今少し慎まれては如何」と率直に忠告した、月仙は

「御親切は有難いがこれには少し仔細のあること、當分御見のがしが願ひたい」

といつて相變らず潤筆料を貪つた、然るに數年の後凶作が打續いて恒産なきものが頗る困窮した時、月仙は蓄へた金の中から五百金を山田奉行に托して救恤金とし、餘を伊勢參宮の道路修繕費に献じ、自らは一生枯淡な生活に甘じたといふ。

阿部井盤根と梅の樹

阿部井盤根翁は福島縣二本松の人で嘗て衆議院全院委員長として噴々たる名聲があつた、翁が議會に出席すべく上京中、鈴木某といふ人が翁を旅館に訪問して

「先生の御庭にある梅は大層老木で見事なものであるといふことである、大東義徹さんが五千圓で買ふといふがお賣拂なさらぬか、金は直ちにお渡しするが品物は其の儘預つて置いて下さつても宜しい」

といふ、盤根翁は

「品物も見ずに大枚な金を出すといふのは奇怪な話ぢや、それに金は直ちに渡すが樹は預つてくれといふのは益々怪しい、阿部井の老骨は瘦せてもまだ五千や一萬

の金では買らぬと大東にそういひなさい」といつて追ひ歸した、蓋し翁は自を買収して政治上の利益を得やうとする大東の意旨を觀破したのである。

嘗て翁が福島縣會議長であつた頃、折田平内といふ人が縣知事になつて赴任し、翁に遇つて

「是からどうか御懇意に願ひます」

といふと、翁は容を改めて

「いや貴下とは御懇意になる譯には参りませぬ、私交と公事とは別であるから差支ない様なものであるけれども、私が現職にある間は矢張懇意に致さぬ方が宜しからうと思ふ」

といつた、後に或事件で縣會議場が頗る混亂した時、折田知事が議長の許可を得ずして發言せんとした時、阿部井議長は大喝一聲

「黙れ」

と叫んだ、平素温厚な翁が雷の如き大音聲を發したので満場鳴を静めて議場が容易に整理せられた、折田知事が警視總監に任せられて知事を辭した時、阿部井翁は始めて知事の宅を訪問して一首の和歌を餞として贈り、

「御在職中は誠に失禮致しました、今日から何卒御懇意に願ひます」

と禮を厚うして挨拶したので折田氏も痛く其の志に感じ、終世親密な交際を結んだといふ、阿部井翁に參禪の經營があつたか否かは知らぬが、其の威武も屈する能はず富貴も淫する能はざる底の氣節は、深き修養ある人にあらずんば得られぬ所である。

五合庵の良寛和尚

越後の良寛和尚は出雲崎附近の國上山にいぶせき草庵を構へ、時に市井に托鉢して五合の米を得れば歸て風月を友とし筆硯に親しんだ、庵を五合庵と呼んで、いぶせきあばら屋であつたけれども

住みなれてこゝも廬山の夜の雨

と詠じ、落葉庵を埋むるも平然として意に介せず

焼く丈は風がもて来る落葉かな

と足るを知つて多く貪らず、籠居にうめば野に出で、兒童と戯れ遊んだ。

或月夜に畑の中を逍遙して芋盗人と見誤られて打擲せられた、打つた人は其の良寛和尚なることを知り大いに驚いて詫びると和尚は

うつ人も打たるゝ人も諸共に

如露亦如電應作如是觀

と詠じて毫も怒れる様子はなかつたといふ。

和尚の書と和歌とは共に天下の至寶として珍重せられる、けれども筆者作者の人格や境界を知らぬものには充分に其の眞價を知ることが出来まい。

天下を掃除すべし

松平樂翁は十七歳の時始めて後漢書の陳蕃傳を讀んで

「大丈夫世に處する、當に天下を掃除すべし」

といふ語に至つて翻然として悟る處があつた、而して樂翁は賢相として能く天下掃除の任を盡したものとといふべきである、然るに堂々たる男子にして耳の穴の掃除も碌々出来ぬものが少くない。

岸駒と頼山陽

岸駒は虎を描く名人で當時噴々の名聲があつたが、頼山陽とは仲が悪く、岸駒が山陽の書を貶せば山陽は岸駒の書を罵るといふ譯で、常に軋轢して居つた、或時山陽は岸駒に繪を所望した、岸駒は不審に思つたが、潤筆料でもウンと取つてやらうと思つて一枚の畫に五十兩を請した、當時の五十兩であるから頗る大枚なものである、山陽も驚いたが深き企のあることゝていふが儘に五十兩を工面して渡して置いて、最早其の繪を相撲取の化粧廻しにさせた、「岸駒岸駒といふて世間では珍重するが相撲取の積鼻禪になるとは情ない」といつて罵つた、之を聞いた岸駒は甚しく憤慨して山陽の

書を藝妓の禪にでもしてやらうと考へて書を依頼すると、何か仕返しをするであらうと待ち構へた山陽は早速繪絹に

天照大御神

と書いて送り返した、岸駒はそれを見て驚いた、天照大御神では藝妓の禪にする譯には行かぬ、忌々しいけれども床の間に懸けて祭つたといふ。

伊藤東涯と三味線箱

伊藤東涯が小冊の書物を入れるに恰好なものであると思つて道具屋から一つの古箱を買つて来た、友人が東涯を訪ふて其の座邊に三味線箱に書物を入れてあるのを見て「君、それは藝妓の三味線箱ぢやないか、三味線箱が神聖な本箱に出世するとは奇拔ぢや」

といつて腹をかへて笑つた、東涯は眞面目な顔をして

「馬鹿をいへ、三味線の様な長いものがどうしてこんな箱へ入るものか」

といつた、學業に熱中して遊戯の道具等のことには全く不案内な東涯は、三味線箱に三味線を入れるには棹をたゝまずに其儘入れるものと思つて居る。

小村侯と圓朝

伊藤博文公が總理大臣であつた頃、何かの宴會があつて各省の大臣次官局長等のお歴々が居列んで歡を盡したことがあつた、當時講談界隨一の人氣者であつた圓朝が招かれて餘興として一席辨じた、講談了つて後、伊藤公が圓朝を召んで盃を遣らうとする、圓朝は恐縮して進み得ない、其の時傍に居たのは當時まだ外務省の一屬吏に過ぎなかつた後の小村壽太郎侯が圓朝の膝をついて

「圓朝、その様に遠慮するには及ばぬ、早く出たまへ、此の席では何といふても君が一番偉いのだ」

といふ、圓朝は疊に頭をすり付けて

「へい、恐れ入ります」

と尙辭退して居る、小村侯が更に

「全く君が一番偉い、全體君には衣鉢を襲ぐものが無からう」といふと、圓朝は

「ハイ、それがございませぬので日頃残念に存じて居ります」と答へた、そこで小村侯は一座のものに聞える様に大きな聲でいつた、

「其處が君の一番偉い處だ、此處には高位高官の御歴々が多勢並んで居られるが、後繼はいくらも控へて居る、然るに君の後繼者たり得るものは日本に一人もないではないか、何も其の様に恐縮することはない」
流石に小村侯は藝術の尊むべき所以を知つた人であつた。

乃木大將の寢具

乃木大將が第五旅團長に補任せられ名古屋に赴いた時、新橋停車場へ見送つたのは川村操六將軍と梶山鼎介といふ人ばかりであつた、而して荷物は公用行李五六箇ほど

持つて居るのみである、名古屋に着いて出迎のものが餘り荷物が少いので外にあるかと思つて「お荷物は」と訊ねると「それ丈ちや」といふ。

兼て定めてあつた借宅へ行つて副官が荷物を開かうとして蒲團も着換もないので不審に思つて

「夜具は何します」

と訊くと

「此の中にある」

と行李を指す、開いて見ると毛布が四枚入つて居る、二枚を下に敷いて二枚を上に着るつもりである、寢巻は洗ひ曝した久留米紵の單衣が一枚だけである、副官が心配をして

「これ丈では足りなくはありませんか」

といふと、將軍は嚴然として色を正していふ。

「心配するな、此だけあれば何時動員令が下つてもすぐ間にあふ」